

くものいと No.31

KU MO NO I TO

2002 February 28

関西クモ研究会
大阪府茨木市

くものいと

No.31, Feb. 2002

目次

- 1 一大ネットワーク展開催：自然，文化，技術における網構造の魅惑と美
船曳和代
- 《寄稿》
- 3 未婚のジグモのその後 西川喜朗
- 4 水田近くでバルーニングしてきたクモ 徳本 洋
- 8 サハリン紀行 松田まゆみ
- 17 タニマノドヨウグモとオオシロカネグモの生活史 吉田 真
- 20 エクアドルに行ってきた！ 加村隆英
- 31 都心部の公園・城址・神社などで減少したクモ～名古屋市の現状～
須賀瑛文
- 34 兵庫県のセアカゴケグモ通信 2001 年版 清水裕行
- フィールド紹介⑤
- 38 京大理学部附属植物園 渡部 健
- 自然観察会シリーズ①
- 39 夜 of 自然観察，やっぱり主役はクモ 本庄四郎
- 40 関西クモ研究会 2001 年度例会の記録
- 41 クモ関係簡体字早見表 西川喜朗
- クモリスト
- 44 キノボリトタテグモの採集記録 西川喜朗
- 45 京都（数カ所）のクモ" 田中穂積
- 48 兵庫県（数カ所）の採集記録"の訂正 田中穂積
- 49 京都府のクモの採集記録 西川喜朗
- 50 関西クモ研究会奈良市内採集会(2001.6.10)報告 赤松史憲
- 54 奈良市採集会で採れたクモ（2001.9.9） 清水裕行
- 57 兵庫県宍粟郡関のクモ 船曳和代
- 61 勇介美術館 池田勇介
- 62 インターネットのクモ情報 榎元敏也
- 67 私たちの研究仲間 清水裕行
- 69 会費納入のお願い／ちょこっとニュース 吉田 真
- 70 クモの糸に彩る山原 仲程悦子
- 71 編集後記

目次

編集後記

自然、文化、技術における網構造の魅惑と美

2002年2月28日-2004年1月31日
ドイツコミュニケーション博物館にて

昨年7月18日、突然 Thomas Hauer 氏からEメールを受け取りました。それによるとドイツのコミュニケーション博物館で企画している「自然・文化・技術における網構造物」に、私のクモの網の絵はがきをいくつか使わせていただけないか、というものでした。絵はがきは、国際クモ学会に出席した柘元夫妻に託して会場で展示販売したものを購入したスイス人から見せてもらったとのことでした。その後ほとんど英語のできない私は、カナダ在住の姪 Guraham Ikumi 氏に仲介役を頼み、何度かメールの交換を繰り返しました。そして絵はがきではなく12枚のパネルの展示が実現しました。

以下に今回の展示のプロジェクトマネージャーである Thomas Hauer 氏に内容を簡単に紹介して頂きました。長期でかなり大がかりな展示のようです。また東京にも "Web of Life" のステーションの一つが設置されるそうです。

尚今回、このような大がかりな展示に出品の機会を与えて下さった Thomas Hauer 氏、そしてそのきっかけを作って下さった柘元ご夫妻、忙しい中メールの仲介役を引き受けて下さった Guraham Ikumi 氏に厚くお礼申し上げます。

船曳和代

フランクフルト、ベルリン、ハンブルグ、ニュエルンブルグのコミュニケーション博物館で、2月28日から、自然界や人工のすばらしい網構造をテーマにした展示が始まります。訪問者は、9つの展示モジュールを通じて、クモの巣に始まり、最新のインターネットの技術にいたるまで、様々な分野における実際の網構造を、鑑賞・体験することができます。

展示の特徴の一つは、原子やクオークと言った超微細なものから銀河や星雲と言った小宇宙に至るまで、その網目構造の類似性にあります。

展示場に入って頂くと、マルチメディアを駆使した様々なウェブと網がまず皆様を迎えます。次のエリアは、クモの巣や菌糸体のような自然界における網目構造物です。訪問客はここで、たとえば、クモの糸は、地球上で最も強靱な材料の一つであり、この世で最大の生き物は、巨大な菌糸体であるというようなことを学ぶでしょう。また、ここには、日本の船曳和代女史のクモの巣を使ったたぐいまれな芸術作品が展示されており、それは、今回の一連の展示の中でも、ハイライトの一つとなっています。しかし、あらゆる自然の網構造の中でも、最も複雑かつ神秘的なのは、人間の脳であり、そのため、脳神経細胞の機能に関する最新の研究成果を展示しています。この複雑な展示にあたっては、世界的に有名なマックスプランク神経科学研究所にパートナーに

なって頂いています。

このあと、徐々にテーマは、自然から人工へと移っていきます。まず最初に目に付くのが、古代から現代にいたるまでの様々な灌漑施設網で、最新のディスプレイ技術を駆使した、実際の水が流れる”水のカーテン”を配しています。また、別の一角では、様々なインフラ網（ガスパイプライン、送電線、上下水道管）が、いかに近代社会（そして脱工業化社会）の発展と機能に貢献したかを扱っています。ここでは、近代都市の心臓部である水道管や電線を、実際に地下に潜ることなく、アーティストのイラストで見ることができます。その次は、現代の交通網とその問題を扱った展示となっています。交通渋滞の問題はよく知られていますが、交通手段はまた、人々に機会と可能性を提供してくれます。更に、電気通信網もまた、世界の発展に大変重要な役割を果たしており、ここでは、イギリスとアメリカを結んだ世界初の海底ケーブルから、現在膨大な量のデータのやり取りに使われているインターネットまで、様々な通信網が展示されています。

最後の一角では、いわゆる社会組織網、つまり、個人のアイデンティティの根幹をなし、ドイツ福祉国家の基礎である家族や集団構造を扱っています。これらの展示と平行して、ZKM（ドイツのカールズルヘにある芸術通信センター）のマルチメディアステーション”Web Of Life”という装置が設置されています。この装置のスクリーンに手を置くと、機械が手のひらの線を読み取って、鮮明な光の織り成すユニークな立体構造を作り出します。その信号を”Web Of Life”のホームページに送ると、誰でも、世界を結ぶ生きた光のネットワークの一部になることができます。この”Web Of Life”のステーションの一つが東京にも設置されることになっています。

さらに詳しいことについては、www.weboflife.de をご参照ください。（英語版もあります。）また、本展示の正確な日時については、www.museumsstiftung.de をご参照ください。

トーマス ハウアー(プロジェクト マネージャー)
訳/Guraham Ikumi

未婚のジグモのその後

西川喜朗

本誌「くものいと、No. 20」(1996)に「未婚のジグモの長生きの記録」(p. 10)を報告したが、この個体の住居がなくなったので報告する。

2000年3月なかごろに、そのジグモ *Atypus karschi* の住居を確認していたが、同年の4月なかごろには確認できなくなった。このジグモは、1991年5月15日に大阪府高槻市原で採集した、体長約15mmのメスの亜成体または成体と思われる個体で、大阪府茨木市西安威の追手門学院大学中庭の、サザンカの根元に住居を作っていたものである(西川, 1996)。このジグモの住居は、それが確認できなくなるまでの間、少なくとも2ヶ月に一度はその住居を確認していた。とくに、2月から6月にかけては、子グモの旅立ちがないか、住居を移動していないかと、注意して付近を調べていたが、どちらも発見できなかった。それで、2000年3月なかごろに天寿(?)をまっとうして死亡した、と判断した。

以上のことから、このジグモの個体は、体長約15mmの時から8年10ヶ月の間生存していた。このジグモが15mmに成長するまでに、仮に2年かかっていたとしたら、合計10年10ヶ月のあいだ生きていたことになる。

このジグモの個体は非常に長生きをしたと思う。「寿命は5年ぐらいといわれている」(学研の図鑑クモ, 1976)というが、ジグモはもっと長生きをする種類なのかも知れない。そして、これは私の推察だが、オスと出会って交接・産卵をする経験のない個体、つまり未婚の個体は、オスの訪れを待ち続けているうちに長い年月を生存し続けた、のではないかと思う。

そもそもジグモは誕生してから、何年後に成体になるのか、一度交接して産卵すると次の年も産卵できるのか、2度めの産卵にも交接が必要なのか、産卵しなくなってから何年ぐらい生きるのだろうか。

また、オスは成体になるのに何年かかるのか、複数のメスと交接できるのだろうか、メスと交接した後の住居や生存日数はどうか、次の年も交接できるのだろうか。メスと出会えず交接できなかった個体はその後どう生きるのか、などなど……。

私の疑問は深まるばかりです。ご存知のかたは、この紙面で教えて下さい。私もまたジグモを飼って調べたいと思いますが、根気が続くかどうかは問題です。

水田近くでバルーニングしてきたクモ

徳本 洋

2001年11月25日午前11時ごろ、金沢市北部の大場町にある「柳瀬川つつみ公園」で、バルーニングしてきたと思われる小さなクモを多数見つけ、採集した。その同定結果を記録し、解説すると共に、gossamerが見られる気象条件としてあげられる「穏やかな晴天」には風が強くないということが重要な意味をもつ可能性を指摘したい。

種リストならびに採集状況

まず、採集された個体の同定結果は次のようである。()内は個体数パーセント値を示す。

<i>Gnathonarium exiccatum</i> (Boes. et Str.)	ニセアカムネグモ	2♀♀	(3.0)
<i>Ummeliata insecticeps</i> (Boes. et Str.)	セスジアカムネグモ	27♀♀30♂♂	(89.0)
<i>Tetragnatha caudicula</i> (Karsch)	トガリアシナガグモ	1y	(1.6)
<i>Tetragnatha</i> sp.	アシナガグモ属の一種	1y	(1.6)
<i>Argiope</i> sp. (amoena?)	コガネグモ属の一種 (コガネグモ?)	1y	(1.6)
<i>Araneus cornutus</i> Clerck	ナカムラオニグモ	1♂	(1.6)
<i>Xysticus</i> sp.	ヤミイロカニグモ属の一種	1y	(1.6)
計		64個体	

当日は1週間ほど続いた晴天日の最後の日であったが、寒冷前線が近づいて来ており、10時ごろから風がかなり強くなってきて帽子を数回飛ばされた。午後には曇ってきて雨になったが、この時はまだ晴れており、気温は17℃ほどであった。これはこの時季の金沢としてはかなり高い気温である。

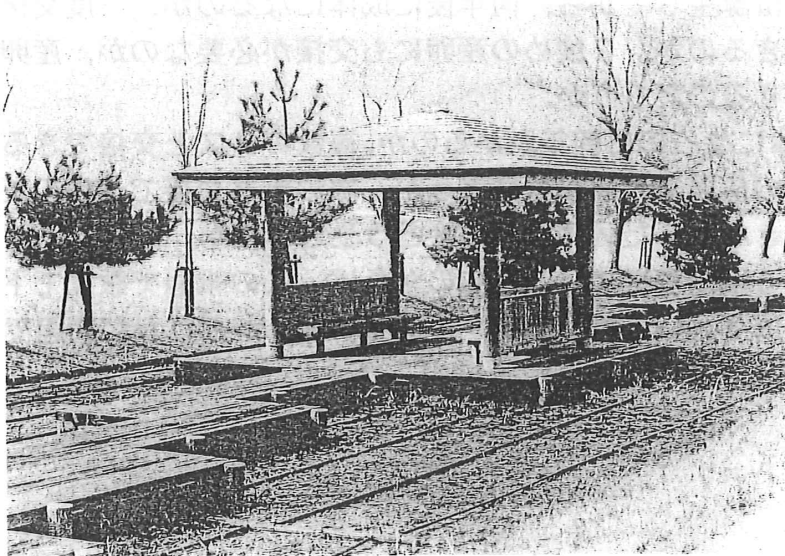


図1 多数の小さいクモが柱に止まっていたアズマ屋

私は朝からここでクモ以外のある調査をしていたが、服の上を微小なクモが歩いているのに気づいた。それは一見してすぐコサラグモ類であることが判り、風で飛ばされてきたものが服にひっかかったのだと考えた。秋末のこの時季では、このような好天は絶好のゴサマ日和であるからである。そしてクモを見つけたのは服の腕の部分であり、このクモが歩き回っている私の足元に地上から取り付いてきて、さらに上着の腕まで這い上がってきたとはとても思えなかった。

ところが、たまたま近くにあった3.5m平方ほどの木造の小さな休憩用あずま屋(図1)の横を通ったとき、その四隅にある直径22cmの円柱の表面に、いまほど私の服上で見たのと同じクモが多数静止しているのを発見した。その様はまさに風に吹き飛ばされないように懸命にへばりついているといった感じであった。

この建築物は平屋の屋根を4本の柱が支えているだけの吹きさらし構造の簡単なものである。ただ床から高さ85cmほどまでは低い腰板部分が2面にあるし、その内側は腰掛け板になっていた。また高さ2.1mの位置には柱を横につなぎ屋根を支える梁材が通っている。けれどもこの建物では目に入る大部分は4本柱の間にある広い空間であって、風はそこを自由に通り抜けていた。

この公園の横は水田地帯でイネの切り株列が一面に広がっている。クモはこの水田地帯にいたもので、それがいっせいにバルーニング行動を起こし、飛ばされてきてこの柱にひっかかったものと私は直感した。ただ、地表近くにいたものが、そこから柱に這い上がってきて柱表面に集まったのかもしれないので、さらに詳しくクモのいる位置を調べてみた。ところがクモは腰板部分や腰掛け板、あるいは高さ2.1mの位置にある梁材にはまったく見つからなかった。もし柱表面にいるクモが地表部分から這い上がってきたものであるならば、腰板部分、腰掛け板あるいは屋根を乗せている梁材にもクモがいてもよいはずである。また、あずま屋の床および周囲は板張りであり、その外側は水枯れしていたがハナショウブ池なので露出した泥底にまばらに草が生えていた。池を取り巻く岸の地表は芝生であるから、いずれもこれらのクモの生息場所としては不適當な環境である。このあずま屋は水田から5mほど離れており、途中で狭い用水が走っている。従ってクモが水田から地表を這って移動してきてあずま屋の柱に登ってきたのだとは考えにくい。これらのことから柱上のクモは風に乗って飛んできたものがひっかかったと考えるのが自然であろう。

これと同じようなあずま屋型の休憩施設はこの他にも離れた個所に数棟あり、それらのうちから計3棟を調べたのだが、いずれの柱でも同じようにクモが数多く見つかった。また、これらのあずま屋以外でもクモが見つからないかとあたりにある立ち木の幹、その添え木、草の葉の上なども探したが見出だせなかった。ただ路傍の一部に並んでいた50本ほどのコンクリート製擬木杭(高さ70cm)の上にはごく少数ながら同じクモが発見された。

これらのクモをすべて採集したのが本報の始めに記したリストである。

考察

(1) セスジアカムネグモが圧倒的に多い理由

この同定結果を見るとセスジアカムネグモが圧倒的に多い。まず、その理由を考え

てみよう。私は今回と同じように水田地帯である石川県石川郡川北町で、秋末の晴天時に、橋のらんかんの上などに多数のクモがいるのを発見して調べたことがある（徳本，1995）。これもゴサマ関連のクモであることは疑いがない。

それは1994年11月24日正午ごろで、穏やかな晴天であった。今回の観察のような風の強い日ではない。その時は農道にかかった小さな橋のらんかんにおびただしい数の小さなクモがいた。そこで採集した全117個体のクモの79パーセントはセスジアカムネグモであった。また同じ日に、そこから少し離れた個所の農道わきに生えている雑草の穂などの上にいたクモを30分間採集して得た53個体の81パーセントはやはりセスジアカムネグモであった。

他県の例では錦（1972）は山形県での長期にわたる調査の経験から、また八木沼（1958）は三重県桑名郡多度町で学校校庭に飛来したクモの調査結果から、セスジアカムネグモ成体が秋末のゴサマの主要構成員であり、その多くが成体であることを指摘している。

とにかくこのように本州では秋末のブルーニングクモにはセスジアカムネグモがひじょうに多いが、これはこのクモの大量発生個所が水田であることによると私は考えている。このことについて以下に述べてみよう。

私は1975年11月6日に能登半島にある珠洲市の水田地帯で標準的二百歩田（691平方メートル、乾田。この「歩」はブと読む。尺貫法の土地面積単位で6尺平方のことである）のイネ刈り跡で調べたところ、1株あたりの平均は1.04個体であり、同水田（イネ株数13,250）1枚に9,000から18,000個体のセスジアカムネグモが生息することが推定された（信頼度95%で計算）（徳本，1976）。おおざっぱに言えば1平方メートルに20個体ほども生息していることになる。なお、これは水田での本種の生息密度として特に大きい値というわけではない。たとえばイネの栽培状態の違いもあり単純には比較できないが、田中（1975）は堺市の水田でクモ類の生息状況を調査しているが、図示されている年間変動のグラフから計算すると11月上旬には1株あたり平均12個体ほどのこのクモが生息していたことになる。私は上記の他にも石川県内の冬季稲刈り跡水田にはセスジアカムネグモが圧倒的に多いという断片的資料をいくつかもっている。

また、このクモは本州、四国、九州では代表的な水田のクモで、しかも秋末にはほとんどが成体となっていて、成体越冬することが知られている（浜村，1969；大熊，1958；田中，1975；徳島農試，1959；山野，1975など）。本種は北海道にも生息するが（八木沼，1960；千国，1989；新海・高野，1984；松田，1997），そこでの生息状況については私は知らない。

セスジアカムネグモは水田以外でも草地などに生息する普通種である。しかし水田の多いわが国では、水田が本種の大生産地であることは上記のように確かである。このことがわが国で秋末のクモブルーニング個体の中で本種が大きな割合を占める理由になっていると私は考えている。まして、石川県内で私が観察した例のような水田地帯で見られるブルーニングしてきたクモの中では本種が大きな割合を占めるのは当然といえる。

（2）ニセアカムネグモが含まれている意味

また、セスジアカムネグモ以外のクモでは、2 個体が含まれていたニセアカムネグモも水田のイネ株間や草間に多く生息しているクモであるという(千国, 1989)。私も石川県内の冬季休閑田のイネ刈り株の間にこのクモがいるのを何度か見ている。浜村(1969)は栃木県宇都宮地方の水田でクモ類の季節的変動を詳しく調査しているが、この地方の水田のコサラグモ類ではニセアカムネグモが最優占種であり、セスジアカムネグモよりも多いという。そして比較的寒い地方ではこの種が水田で優占するのでないかと記している。浜村は当時のクモ分類学の知見に従って、このニセアカムネグモを *Gnathonarium dentatum* (Wider) としている。このころは *G. exiccatum* は *G. dentatum* のシノニムと考えられていたらしい。しかしその後、斎藤(1983)は日本産 *Gnathonarium* 属には 3 種あることを明らかにし、そのうちの最普通種である *G. exiccatum* にニセアカムネグモの和名を与えている。そして *G. dentatum* は山間でわずかに見出されることからヤマアカムネグモの和名を与えた。谷川(2000)の日本産クモ目録もこの所見に従っている。従って栃木県の水田に多いとされるニセアカムネグモは *G. dentatum* ではなくて、*G. exiccatum* であるかもしれないが、その当否はどなたかに再検討していただくしかない。千国(1989)にはニセアカムネグモ *G. exiccatum* (Boes. et Str.) として図や解説が載っている。しかし、ニセアカムネグモとヤマアカムネグモはきわめて似ており、しかも両種共にセスジアカムネグモよりもさらに小さい種なので、この図鑑の図だけでは識別困難であり、斎藤(1983)なども参照したほうがよいと私は思っている。また、浜村(1969)のいうように寒い地方の水田ではニセアカムネグモがセスジアカムネグモよりも優占するとすれば東北地方や北海道の水田はどうなっているのかも知りたいことである。

(3) 風力とバルーニングとの関係

なお、今回の観察において初めの採集を終えてから1時間ほど後にもう一度3つのあずま屋を見回したが、クモ個体はまったく見つからなかった。従ってこの間に新しく飛んできたクモはなかったことになる。1時間ほど前には、柱上のクモがすべてへばりついたように静止しており、歩行しているものがないことがなかったことと、秋末のゴサマ現象は穏やかな晴天のときによく見られるものであることと併せ考えると、風が強いとクモはかえってバルーニング行動を起こさなくなるのでないかと考えられる。もしそうであれば、柱上に多くいたクモはまだ風が強くなかった10時ごろ以前に飛来してきたものであったことになる。ゴサマ現象の起こる気象条件としてあげられる「穏やかな」晴天ということの中には風が強くないことが暗黙に含まれているであろうが、本報では風が強いはバルーニング行動をかえって抑制する可能性があることを指摘し、その当否を今後の検討課題として皆さまに提起しておきたい。

摘要

1. 石川県金沢市の水田地帯で11月下旬に観察された gossamer による飛来と考えられるクモ個体群の調査例を記録し、解説した。
2. 本州の秋末に見られるバルーニング個体群はセスジアカムネグモ成体が大きな比率を占めているが、その多くは水田由来のものであると推定し、その根拠を述べた。
3. Gossamer 現象がよく見られる気象条件として、秋末の「穏やかな晴天」がよくあ

げられるが、この「穏やか」の中には風が強くないということを重要な条件として含んでいる可能性があることを提示し、その根拠を述べた。

引用文献

- 千国安之輔. 1989. 写真日本クモ類大図鑑. 1-308. 偕成社. 東京.
- 浜村徹三. 1969. 水田におけるクモ類個体群の季節的変動. *Acta Arachnol.*, 22 (2): 40-50.
- 松田まゆみ. 1997. 北海道産クモ目録. 上士幌ひがし大雪博物館研究報告, (19): 1-46.
- 錦 三郎. 1972. 飛行蜘蛛. 1-191. 丸ノ内出版. 東京.
- 大熊千代子. 1958. セスジアカムネグモの生態. *Acta Arachnol.*, 15 (2): 21-23.
- 斎藤 博. 1983. 日本産 *Gnathonarium* 属の種について. *Atypus*, (83): 3-6.
- 新海栄一・高野伸二. 1984. フィールド図鑑クモ. 1-204. 東海大出版会. 東京.
- 田中穂積. 1973. 近畿における水田に生息するクモ類の生態学的研究 (1) セスジアカムネグモおよびヤマトコノハグモの生活史について. *Acta Arachnol.*, 25 (1): 10-15.
- 田中穂積. 1975. 近畿における水田に生息するクモ類の生態学的研究 (2) セスジアカムネグモおよびヤマトコノハグモの季節的変動について. *Acta Arachnol.*, 26 (2): 51-57.
- 谷川明男. 2000. 日本産クモ類目録 (2000 年版). *Kishidaia*, (78): 79-142.
- 徳島県農業試験場. 1959. 殺虫剤とクモ・クモの害虫捕食例. 徳島農試 1958 年度成績.
- 徳本 洋. 1976. クモ類. 石川県珠洲市史, 1: 394-400.
- 徳本 洋. 1995. その他の動物. 石川県川北町史, 1: 288-305.
- 八木沼健夫. 1958. 糸にのって飛んだクモ. *Atypus*, (17): 8.
- 八木沼健夫. 1960. 原色日本蜘蛛類大図鑑. 増補改訂版. 1-206. 保育社. 大阪.
- 山野忠清. 1975. 厚木市の水田におけるクモ類とその季節的変動. *Atypus*, (64): 27-34.

サハリン紀行

松田まゆみ

北海道でクモを見ていると、サハリンは一度は行ってみたいと思うところである。氷期に大陸と北海道を結んだというこの島は、北海道に多数の北方系の生物を運ぶ陸路となった。大雪山の高山帯に細々と息づいている「氷河時代の生き残り」のクモたちも、この島を縦断して来たのだと思うと感慨も深い。

宗谷岬から目と鼻の先にある島でありながら、サハリンの自然を訪れるツアーは意外とないのである。聞くところによるとトラブルなしにツアーを行うのは難しいお国柄のようだ。そんな中で「地質見学ツアー」なるものを見つけた。地質見学？ 8月じゃクモには遅い！と躊躇したのだが、思いきって締切り間際に申し込んだ。予定表を見ると宿泊するホテルはガイドブックには出ていないホテルで、名前はなんと Geologist (地質学者)。しかもシャワーは水しか出ないらしい。そんなわけで、覚悟を決めて出発することとなった。

企画した旅行会社のT氏とコーディネーターのG氏以外の一般参加者は6名というごぞんまりとしたツアーであるが、自然を見てまわるのにはちょうどよい人数だ。男性5人、女性3人の総勢8名は、8月8日の10時に稚内港からコルサコフ行き「アインス宗谷」に乗り込んだのである。

目と鼻の先のサハリンも、稚内港からコルサコフ港となると5時間30分もかかる。男性たちは免税とやらで1本100円の自販機のビールをさっそく買い込んでいる。船に弱い私はそれを横目で見ながら、ひたすら船の揺れから開放されるのを待つのみである。サハリン旅行はまずは船酔いから幕を開けた。

コルサコフ港に近づくと、褶曲した地層があらわな露頭が目飛び込んでくる。港は何もかもが古びて錆色をし、数十年前の港に迷いこんだような錯覚におちいる。船から降り、オンボロバス(日本の中古の観光バス)に揺られて入国手続きの人の列に並んだ。特大のスーツケースをK氏に持たせた私は、代わりにカメラを一手に引き受け、手に持っていた。しかしこれは失敗であった。カメラはX線検査機に通された上、税関申告書に記入しろと言う(ロシア語なので、そう言っているらしいとしか分からない)。輸出入品(一時的な)に当たるらしい。コンパクトカメラまで記入させられたが、なぜか首からぶら下げていたツァイスの双眼鏡には見向きもしない。こちらのほうが数倍も高いのに！世話人らしき日本人のおじさんがぶつぶつ言いながら記入のしかたを教えてくれたが、あやうく Matsuda とサインしそうになった。パスポートは戸籍上の名前の Kawabe なのである。自分の名前を書き間違えたらなにやら疑われそうに冷汗をかいた。

税関を抜け出すと、今回のツアーの世話をしてくれるロシアエネルギー省の地質研究者のジャロフ氏と、お手伝で日本語を勉強中の青年セルゲイ氏それに運転手が出迎

えてくれた。これから私達の足となってくれる車はエネルギー省の調査用のものなのだが、トラックの荷台を人が乗れるように改造したような車で、タイヤはダンプカーのそれより巨大だ。これをジャロフ氏はバスと呼んでいたが、舗装道路を砂利道だと勘違いする乗りごちであった。現にコルサコフからホテルのあるユジノサハリンスクに向かっているときは、砂利道だとばかり思っていたのだが、あとで舗装道路だと知って驚いた。これから五日間この車にのって走り回ると思うと、ちょっと先が思いやられた。

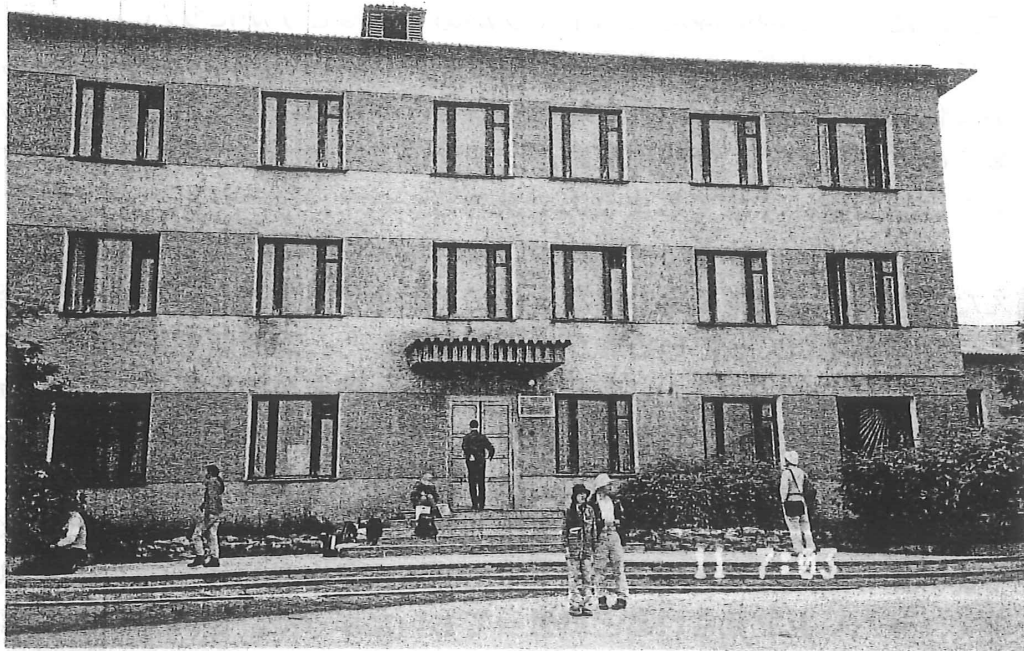


サハリンは主要道路は舗装されているものの、わき道はほとんど砂利道である。それもそうとうにでこぼこしている。日本人であればすぐに道を良くしようという発想になるが、ロシア人はそうではないらしい。彼らは車のほうをでこぼこ道に合わせ、どこでも走れるような頑丈な車に乗るのだという。エネルギー省の車はサハリンの悪路という悪路もものともしない車である。おかげでかなりすごい山道も進むことができるし、ちょっとした川も渡ることができるのだ。

ホテルに到着したのは日本時間の5時半、現地時間の7時半であった。ホテルは古い建物ではあるが、予想していたより印象は良く（かなりすごいところを予想していたのだが）、昨夜泊まった稚内の旅館よりきれいだった。そして、シャワーからはちゃんとお湯がでたのである。これで一週間風呂なしという惨事にはならなくてすむ。このホテルを基点としてサハリン南部の各地に出向くのである。

このホテルはどうやらロシア人専用らしい。フロントの女性は英語は全く通じない。部屋の鍵をもらうのも、紙に数字を書いたものを見せないと分からない。レストランもなく皆素泊まりらしいが、私達は棟続きの韓国人の経営しているというレストランで食事を摂ることになっている。レストランの入口あたりからキムチの匂いが漂って

くる。



毎日のスケジュールは朝食後にホテル前に集合して例の車に乗り込み、日中 10 時間から 12 時間がフィールドワークとなる。帰るとすぐ夕食となり、ワインやウオッカを飲みながらの団欒である。部屋にもどりシャワーを浴びると疲れて何もする気になれない。クモの標本にラベルを放り込んでボタンキューである。予定していた朝の散歩は、結局 2 回しか実行できなかった。

サハリンの街は何もかもが古び建物はあちこちひびがはいったり壊れたりしているし、路傍にはゴミも目につく。しかし街を歩く若い女性は美人揃いのうえ皆抜群のスタイルで、しかも体にフィットしたセンスの良い服をまとっている。Tシャツにジーンズばかりの日本人とは全く雰囲気が違うのだ。この光景を見て「掃きだめに鶴」と言った人もいるとか。そして日本では渡りの時期を除くと高山の岩場でしか見られないアマツバメの群舞が、この古いビル街の上空に普通に見られるのだ。その見事な飛翔にはしばし見とれてしまう。

さて、地質見学など学生の時実習で行ったぐらいで全くピンと来なかったのだが、初日の行動でだいたい様子がかめた。要するに見学地点となる場所までただひたすら車で移動し、現地に着いたら説明を聞き、見学やら採取やらをするのである。そしてその見学地点の多くは道端の露頭なのだ。しかも欲張ってあちこちまわるので、一箇所の見学時間はあまり長くはない。つまり、大半の時間は車の中で、クモ採集はもっぱら道端ということになるのだ。「あそこの林を歩いてみたい」「あの湿地でスイーピングをしたら面白いのが採れるのでは」と思っても、車はどんどん通りすぎていく。クモ採集は半ばあきらめ、車窓から植物や景観を観察することとした。

サハリンの景観は基本的には北海道とほとんど変わらない。違うのは落葉針葉樹の

グイマツがあるくらいだ。トドマツとグイマツの森林が多く、落葉広葉樹はヤナギ類やカンバ類が目につく。ちょうど北海道の標高 800 メートルから 1000 メートルぐらいにある針葉樹林帯によく似ている。海岸ちかくにある湿地も、北海道の湿地の景観とそっくりだ。ただし、平地の湿地にハイマツがあるのはさすがにサハリンである。そして、濃いピンクのヤナギランの群落と藤色のキク科植物の群落が単調な湿地にひとときわ華やかな色を添えている。8 月中旬ともなると、草原はもはや初秋の漂いがある。そして多くのクモもすでに繁殖期を終え、初秋のクモの季節であった。ここではクモのシーズンは瞬く間に過ぎてしまうのであろう。

最初に捕えたクモは朝の散歩で見つけたシロタマヒメグモである。ちょうど産卵期で、葉をまるめて産室をつくっているのがいくつもあった。北海道で見るシロタマヒメグモは、見るからに「シロタマ」という名のふさわしい淡黄色の腹部をしているが、サハリンのものは黄色かったり、褐色の斑紋が入っていたりするものが多くてまるで別種のように見える。これほど色彩が違うのはなんとも不思議な気がする。

朝食をすませると、いよいよ例の車に乗り込み見学に出発である。コルサコフの最初の見学地でまず採ったのは黒色型のオニグモである。北海道では見たことがない黒色型だったので、サハリンで見られるとは思ってもいなかった。オニグモは軒先にとときどき網を張っているが、あまり多くはない。分布の北限に近いのであろうか。

コルサコフの東、アニワ湾の一角にある岩壁では岩のくぼみにオオツリガネヒメグモが多数造網していた。北海道でもそうであるが、一般に岩に生息するオオツリガネは体色が黒っぽい。岩の色に合わせた隠ぺい色なのであろうか。ユウレイグモ科の雄も 1 頭採集した。

南東部は湖が多く、湿地も点々としているがそういうところは地質見学の対象地ではなくどんどん走り抜ける。しかしこのあたりはほとんど自然のままに保たれていて、マスが川に遡上する光景も見ることができた。トゥナイチャ湖岸でようやくナカムラオニやアシナガグモなどを少し採集したが、初日はひたすら車に揺られ、ユジノにたどりついたときにはもう薄暗くなっていた。なかなかすごいツアーだ。

2 日目は西部に出かけた。アニワの海岸では一人皆と反対方向をうろうろしイソコモリを探したが見つからない。露頭見学中にクモを採集するが、ハラビロアシナガグモ、スジシャコグモ、ウスリーハエトリ、ナカムラオニグモ、ウツキコモリなど北海道でおなじみのものばかりだ。見学地に着くといつも皆と違うところをうろうろしている私を、セルゲイ氏はいつも気に留めてくれているのが分かる。なるべく皆から見えないところにいなければならない。

8 月という季節から考え、キバナオニ、ニワオニ、アカオニの 3 色のクモが溢れていると思ったのだが、予想は外れた。キバナが圧倒的に多く、ニワとアカはなかなか見つからないのだ。そういえば北海道でもキバナが圧倒的に多いからそんなものなのかも知れない。もっともクモを探す時間が少ないので、時間をかけて探せばもっといるのであろう。北海道でおなじみのナカムラオニグモは草地の普通種である。

サハリンでは平地にベニヒカゲが舞っている。ネベリスクのバザール（自由市場）

では、オオモンシロチョウを捕まえた。近年北海道全域に定着してしまったチョウである。クモのみならずチョウも時々捕まえたが、捕虫網というのが珍しいらしく好奇心の目で見られてしまった。軒先のオニグモを捕虫網で採っていたときなど、大人も子供もにたにたしながらこちらを注目している。捕まえているのが大きなクモだと知ってかなり面食らっていたようだ。さぞかし変な日本人の集団（変なのは一人だけなのだが）だと思ったであろう。

ネベリスクから海岸沿いを北に、ホルムスクに向かった。ここには旧王子製紙の工場が廃虚のように佇んでいる。サハリン南部の森林はかなり伐採が入り原生林とおぼしき森はほとんど見当たらないが、かつてかなりの伐採が行われ王子製紙も栄えたのであろう。無残に伐られた山肌は、北海道の森林の光景とも似ている。ホルムスクからユジノまではいくら車が揺れても瞼が閉じてくる。昨日は初めて見る景色とあって、いねむりもせず目を凝らせていたが、今日は半分以上いねむりの帰途である。運転手さん御苦労さん！

3日目はススナイ山地に寄った後、北へと向かった。ソコル川で初めて森林の中に入ったのだが、前を歩いていた人が「クモ、クモ」と呼んでいる。森林の中は、タイリクサラグモがあちこちに造網していたのだ。北海道ならどこにでもいるタイリクサラグモをあまり見かけず、不思議に思っていたのだが、針葉樹の森林内はタイリクだらけだ。しかし、タイリクばかりでハンモックなどは全く見られない。森林のクモ相は北海道よりさらに単純なようだ。

昼食予定地のスタロブスコエは海岸の集落だ。海沿いのでこぼこ道を行くと、岩礁の上にゴマフアザラシが置物のように寝そべっているのが見渡せる。ここにはモンゴリナラ（ミズナラと変種関係）があるが、だいぶ伐採されてしまったらしく今ではぼつりぼつりとしか見られない。このあたりから北の光景はほんとうに素晴らしい。人工的なものはほとんどない海岸線が続き、湿地が広がる。渚にはシギが群れ、カモメが舞う。北海道の海岸線もかつてはこんな光景だったのに違いはない。北海道ではほとんどの湿原にビジターセンターのような施設があり、海岸には展望台などがある。人工物が目に入らないようなところは無いに等しい。しかしサハリンには北海道が失ってしまった北の自然の原風景が息づいている。施設ばかり造りたがる日本人は、こういう自然の原風景を忘れてしまったようだ。

この日はさらに北上し、海岸で琥珀を探した。角がとれた褐色のガラスのかけらのような琥珀が、海岸の砂浜にうちあげられているのだ。小粒だが、こんなところで琥珀が拾えるというのは驚きである。皆海岸に散らばって、ひとしきり琥珀拾いを楽しんだ。採集するというのはクモに限らず楽しい。しかし採集には得手不得手というのがあるらしい。集合し成果品を比べるとその差は歴然とする。どうも私はあまり得意な方ではない。やはり採集は一人でのんびりやるのが一番いい。

サハリンの一番細くくびれている辺り、ブズモーリエがこのツアーの最北の地点である。ここには海を見下ろす山腹に日本時代の鳥居がそのまま残っている。何やら日本の景色のように見える。鳥居まで登って写真を撮った後、駅前のバザールに寄った。地面に散らばっている褐色のかけらを見つけ誰かが「琥珀だ」と言う。半信半疑で手

に取って眺めるが、ビール瓶のかけらまで琥珀に見えてくる始末だ。



4日目はアンモナイトの産地見学である。最初の見学地は乾燥した裸地で、ときおりコモリグモが走りまわっている。ここではクモよりアンモナイトを探すほうが面白い。地質屋さんはハンマー片手にさすがに大きいのを掘りだしていたが、小さいのならハンマーなしでもいくつも見つけられる。

2回目の見学地は山の中の川沿いの崖地である。ここは森林に囲まれた河原で、クモ採集の方が面白い。河原の石をひっくり返すと、カワベコモリグモやナミハガケジグモがいる。一人で河原でクモ採りをしていると、高校生のAさん（母親と参加）が崖地の方から「クモを採った」と呼んでいる。彼女の手には綺麗なニワオニグモが握られていた。この数日で彼女はすっかりクモに慣れてしまったらしく、私を真似て素手でクモを採るようになったのである。感謝、感謝！ さて、その崖地の上部には巨大なアンモナイトがはまっている。地質に無頓着な私もこの時は「すごい」とみとれてしまった。

最終日の5日目は、午前中にユジノを一望できるスキー場のてっぺんまで登った。例の車はでこぼこの急坂もものともせず、標高535メートルの山頂に突き進んだ。中腹までグイマツの植林に覆われる山だが、途中でハイマツも見られる。標高が上るにしたがって、林床の植物が変わっていくのが面白い。

山頂からは素晴らしい展望が広がっていた。眼下にユジノの街が見渡せる。これでこのツアーの見学は終わりである。皆が景色を楽しんでいる間、私は山頂の草地で一人チョウ採りにはまっていた。この草地にはチョウがしきりと飛び交っているが、これがすばらしく速い。悪戦苦闘だが、これを追いかけるのがまた楽しいのだ。いい歳のおばさんがチョウ採りに興じているのだから、他の人はさぞかしあきれていただろ

う。

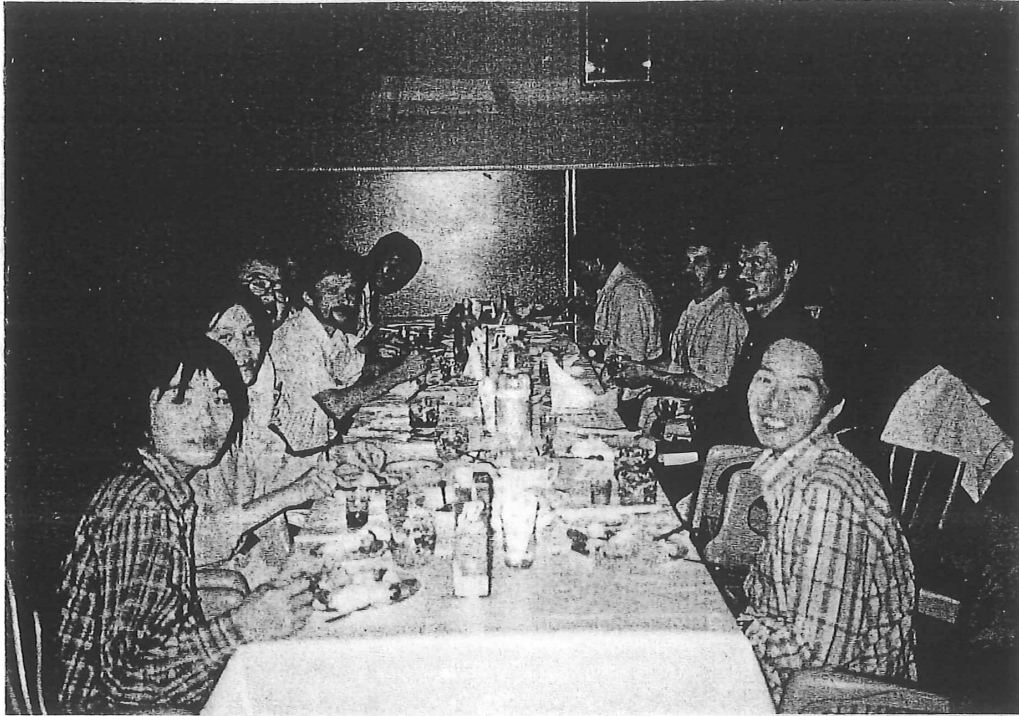
のどかな山頂のひと時を後に車に乗り込むと、運転手が捕虫網を貸して欲しいという。すぐ横の花にチョウが数頭止っている。彼は見事に数頭のチョウをしとめ私にプレゼントしてくれた。もしかしたら、彼はずっと捕虫網でチョウを採って見たかったのかもしれない。海辺で休憩した時は網でエビを獲っていたし、アンモナイトを見つけるのも得意だ。「気は優しくて力持ち」の典型のような彼はどうやら採集好きのようだ。

このあと、私と夫のK氏は皆と別れてジャロフ氏の自家用車で北に向かった。皆は最後の半日を買物に当てたのだが、どん欲な私達は車のなかから眺めただけの湿地に未練があった。吉倉真先生の「樺太産黄金蜘蛛科生態と分類」を見ると、サハリンでは平地にコウモリオニグモやコガネオニグモがいることになっている。湿地を眺めただけで帰るのはやはり後ろ髪を引かれる思いがする。そこでジャロフ氏に頼み、湿地探検におもむいたのである。彼は腿まである長靴まで用意してくれた。



サハリンとは言えど、この日は猛暑だ。その中を長靴をはいて捕虫網片手に湿地のなかをうろつくと汗が吹き出してくる。葦の葉を巻いているのは、ほとんどがヤガタフクログモで、子グモがふ化する季節だ。水辺には卵のうをつけたカイゾクコモリグモがいる。草間の円網はほとんどがナカムラオニグモだが、なぜかこの湿地のナカムラは幼体ばかりである。ここのクモは北海道の湿地のクモをより単純にした感じだ。ちょっとがっかりであったが、採集品を良く見るとナカムラオニグモの幼体の中にコウモリオニグモの幼体がまぎれこんでいる。北海道では高山帯の湿地でしかみられないコウモリがやはり平地にいるのだ。ただしもう成体の季節ではないらしい。コガネオニグモは残念ながら幼体らしきものも採れない。スゲと思われる草地ではツノタテグモ

の類いと思われる幼体が少し採れたが、やはりクモの季節には遅すぎるようだ。北に行けばいくほど、クモの繁殖期は短期間に凝縮されるのだろう。たぶん6月から7月が良いのだと思う。ともかく短い時間ではあったが湿地も歩くことができた。あとはユジノにもどり、ガガーリン公園で皆と落ち合ったあと最後の晚餐となったのである。



クモに関しては季節が遅すぎ、幼体ばかりが目についてとりたてて新しい発見はなかったものの、サハリンの自然の一端を垣間見ることができたのはやはり貴重な体験であり、楽しい一週間であった。そしてお付き合いいただいたエネルギー省の皆さんは、朝から晩までくたくたに疲れたことであろう。我々をコルサコフまで送り届けたときにはさぞかしほっとしたに違いない。

こうして5日間の見学会はハードスケジュールであったが、無事終了した。不思議なことに一週間の間、雨らしい雨にも降られず、トラブルもなく、すばらしく順調にすることがはこんだのである。あとは税関を無事通過できるかどうかである。

翌朝予定より遅れてコルサコフ港に到着した私達は、出国手続き追われあたふたと税関を通過した。誰も荷物を開けられることもなく皆無事に通過し、安堵のうちに再び「アインス宗谷」の乗客となったのである。

タニマノドヨウグモとオオシロカネグモの生活史

吉田 真

タニマノドヨウグモとオオシロカネグモは溪流に生息するアシナガグモ科のクモである(新海・高野 1984, 1987; 吉田 1974; Yoshida 1989, 2000)。この小論では、両種の生活史について報告し、生活史と場所選択・種間関係について論ずる。

方法

1990年10月から1991年10月まで、鴨川の一支流である静原川で、ほぼ一ヶ月の間隔でクモを採集した。それぞれの地点で直径50センチの傘を逆さにし、川岸の草や灌木を棒で200回叩いて落ちたクモを吸虫管で集め、サンプルとした。実験室で、クモの頭胸長を測定した。

結果

図1は、両種の頭胸長の季節的变化を示したものである。両種は幼体で越冬し、翌年の春に成長して、6月には成体が出現した。両種ともに、成体は8月20日まで採集された。タニマノドヨウグモの仔グモは7月23日にはじめて少数出現し、8月20日には多数の仔グモが採集された。これに対して、オオシロカネグモの仔グモは8月20日にはじめて出現した。このように両種は、夏に繁殖する年1世代の生活史を持っている。

考察

両種とも夏に繁殖する年1世代の生活史を持っており、タニマノドヨウグモの方が仔グモの出現時期が早い点を除いて、生活史はよく似ている。ただし、8月20日の調査でオオシロカネグモの仔グモは多数採集されており、仔グモの最初の出現は8月上旬または7月下旬までさかのぼるのかもしれない。

さて、両種はともに溪流に生息するアシナガグモ科のクモである(新海・高野 1984, 1987; 吉田 1974, 1977a; Yoshida 1989, 2000)。よく似た生活史を持つということは、ほぼ同じ時期に仔グモや成体が出現するということである。このような生活史の一致は、両種の造網場所選択や種間関係にどのような影響を与えているのだろうか？

筆者は、両種の成体間で起こる頻繁な干渉を7-8月に観察している。タニマノドヨウグモは日没前後に休息場所から出現して造網するが、その前に造網の障害となる他のクモの網を破壊する。タニマノドヨウグモの造網が水面上の空間に限られているために、壊されるのは水面上に張られた網だけである(吉田 1977a, b, 未発表)。オオシロカネグモは川岸や川から少し離れた場所にも造網する(新海・高野 1987; 吉田 1974, 1977a)が、そのような場所に張られた網は破壊されない。溪流上は餌が多い良い場所である(吉田 1977a)が、タニマノドヨウグモによる網の破壊によって、ここはオオシロカネグモにとっては造網しにくい場所であり、後者は、多少とも、川岸への造網を強いられていると思われる。逆に言えば、オオシロカネグモが溪流上だ

オオシロカネグモ

タニマノドヨウグモ

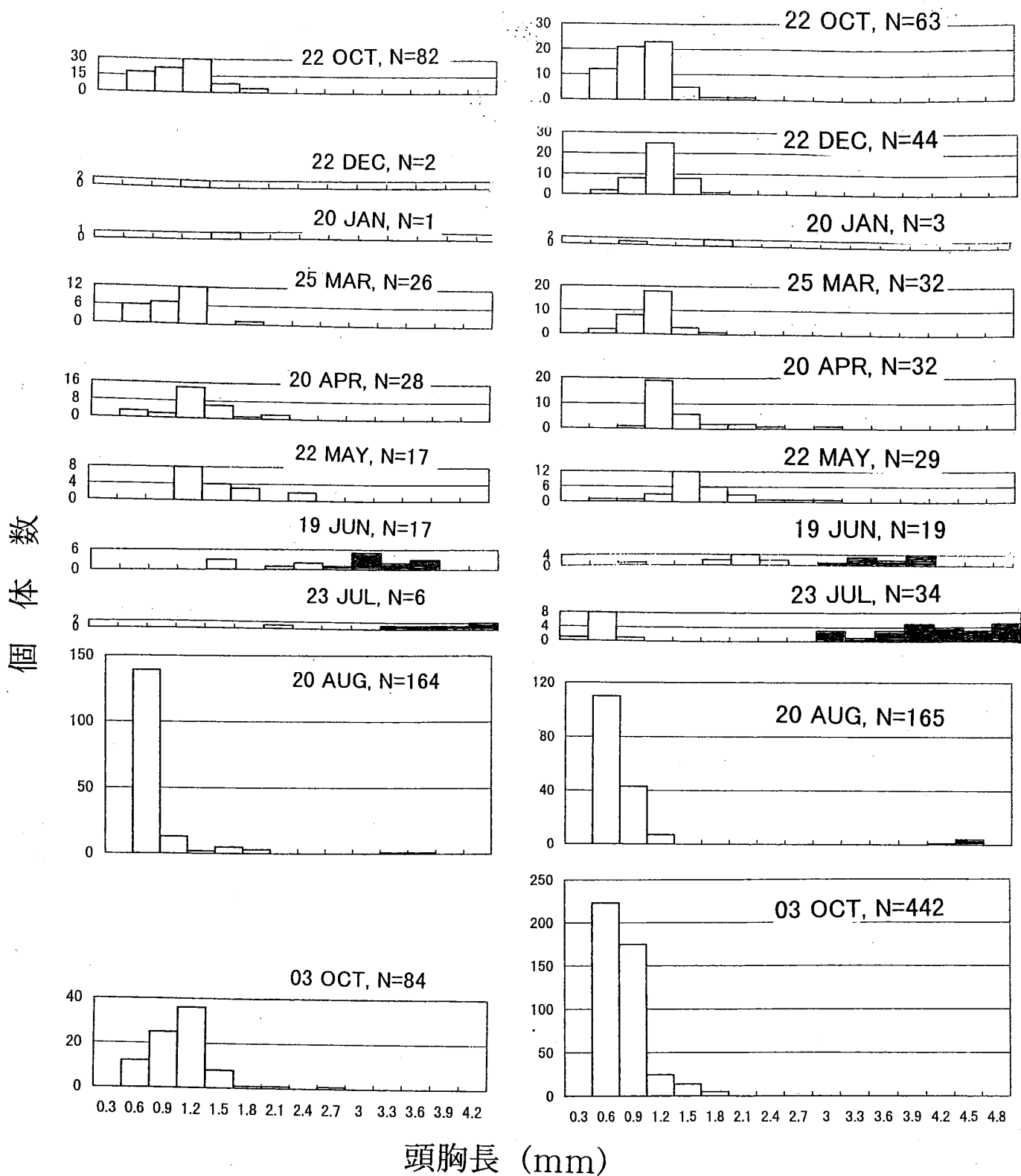


図1 オオシロカネグモとタニマノドヨウグモの頭胸長の季節的变化.

けでなく川岸などにも造網することが、類似の生活史を持つ優位種であるタニマノドヨウグモとの溪流での共存を可能にしているのであろう。

仔グモの時期にはどうであろうか？溪流付近で生まれたオオシロカネグモの仔グモの多くは川岸に造網し、溪流上での造網は少ない（吉田 1974）。これに対してタニマノドヨウグモの仔グモは、水面上、たとえば溪流の岩の間や溪流に張り出した木の枝などにのみ造網する（Yoshida 2001a; 吉田 未発表）。従って、仔グモの時期には両種の間競争はほとんど起こらない。

引用文献

- 新海栄一・高野伸二. 1984. フィールド図鑑 クモ. 東海大学出版会, 205pp.
- 新海栄一・高野伸二. 1987. クモ基本 50. 森林書房, 128pp.
- 吉田真. 1974. オオシロカネグモの仔グモの成長と分散過程の分析. *Acta arachnol.* 26: 11-17.
- 吉田真. 1977a. 溪流付近に生息するクモ4種の造網場所選択—餌量を中心とした共存条件についての一考察. *Acta arachnol.* 27 (special number): 261-281.
- 吉田真. 1977b. 溪流上に造網するクモ数種の個体間干渉—干渉の選択性とその意義. *Atypus* 70: 3-8.
- Yoshida, M. 1989. Predatory behavior of three Japanese species of *Metleucauge* (Araneae: Tetragnathidae). *J. Arachnol.* 17: 15-25.
- Yoshida, M. 2000. Predatory behavior of *Leucauge magnifica* (Araneae: Tetragnathidae). *Acta Arachnol.*, 49: 117-124.
- Yoshida, M. 2001a. Kleptoparasitic behaviors of two orb-weaving spiders in webs abandoned by *Metleucauge kompirensis* (Araneae: Tetragnathidae). *Acta Arachnol.*, 50: 5-10.

エクアドルに行ってきた！

加村隆英

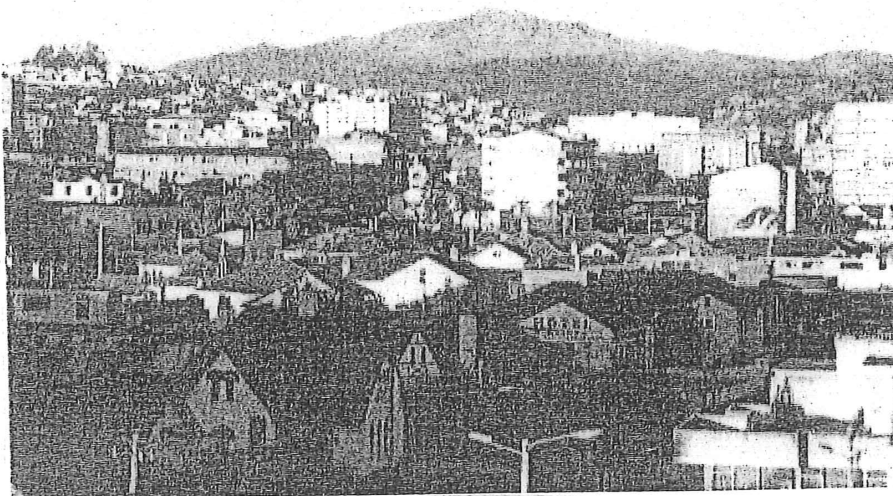
昨年の夏 (2001年7月25日～8月7日) に南米エクアドルに行くことができた。これは、神奈川の谷川明男さんに誘ってもらった貴重な機会であった。この旅行は本来、神奈川県の高등학교の先生たちの研修のためのものであったのだが、そこにもぐり込ませてもらったわけである。添乗員を含めて総勢21名の参加者のうち、関東の谷川さん、池田博明さん、小峰光弘さん、そして、関西の吉田真さん、船曳和代さん、私と私の妻の計7名がクモ関係者であった。

●いざエクアドルへ

外国に2週間出かけるとなると、それまでに片付けておかなければならない仕事もあるし、留守中の段取りもあるし、あれこれとたいへんである。ともあれ、ばたばたと準備をして、なんとか出発の日を迎えた。7月25日に成田に集合。ここからヒューストンを経由して、エクアドルの首都キトまで飛ぶ。ヒューストンでの乗り換え待ち時間を含めて所要時間は約20時間30分である。

エクアドルと日本の時差は14時間。キトに着いたのは、出発と同じ7月25日の夜の10時半頃であった。空港を出て、重いスーツケースを押しながら、バス乗り場まで歩く。バスに着いた時に妻が言った。「呼吸が苦しい。長距離走をしたあとみたい。」ここは標高2800m。やはり空気が薄いのである。

ともかく、最初の宿泊場所であるホテル・セバスチャンに到着。なかなかきれいなホテルであったが、夜も遅かったので、ゆっくりくつろぐということもなく、早々に寝てしまった。

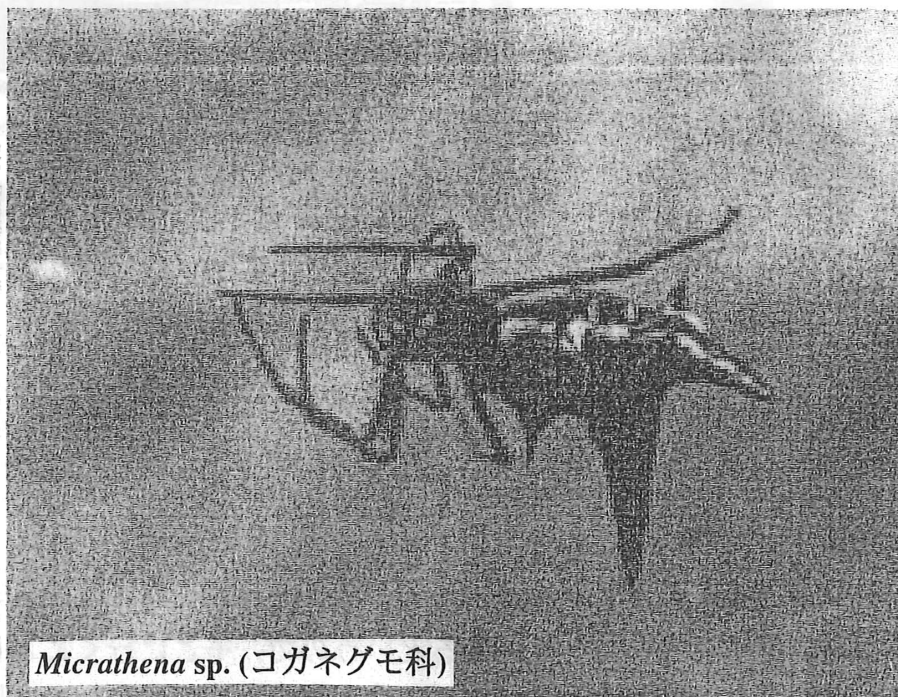
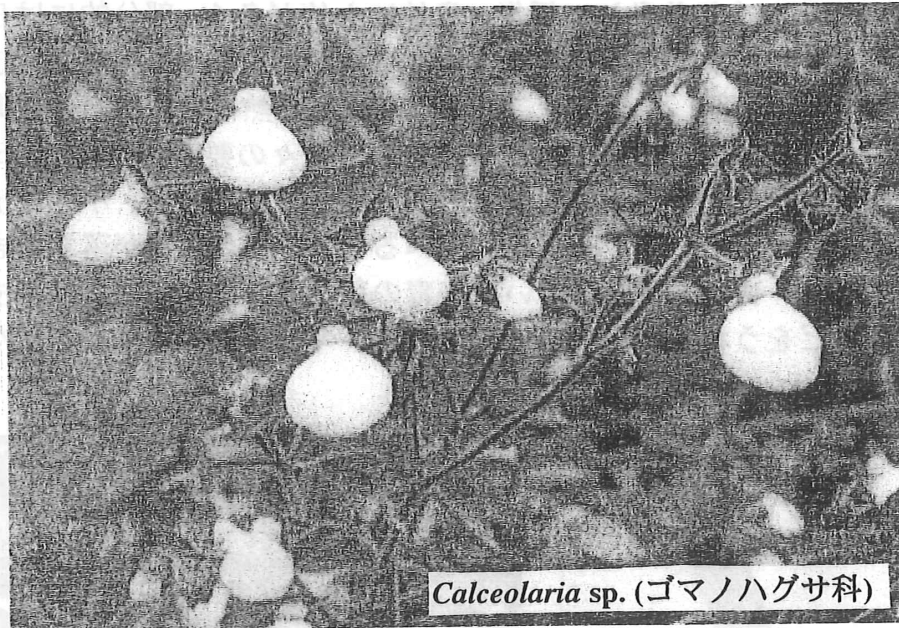


キトの町並み

●ミンド村

さて、翌 26 日は、キトから 30 km あまり北西に離れたミンドという村への移動日である。植物、鳥、クモなどの研究対象ごとに小グループに分かれて、観察や採集をしながら移動する。専用の車と運転手、さらに、ガイドも付いてくれる。ガイドの 1 人はパブロさんという好青年である。彼は車の中では助手席に座り、ほとんどずっと後ろを振り向きながら、いろんな話をしてくれた。しかし、その早口なこと。英語力の乏しい私には、ほんの断片的にしか聞き取ることができなかった。

ホテルを出てしばらくは、キトの市内を走る。市街地には多くのユーカリが植えられている。市街を抜けて、山に向かって行けども、全体に乾燥していて、植物相は貧弱である。目につくのはサボテンやリュウゼツランだけであった。

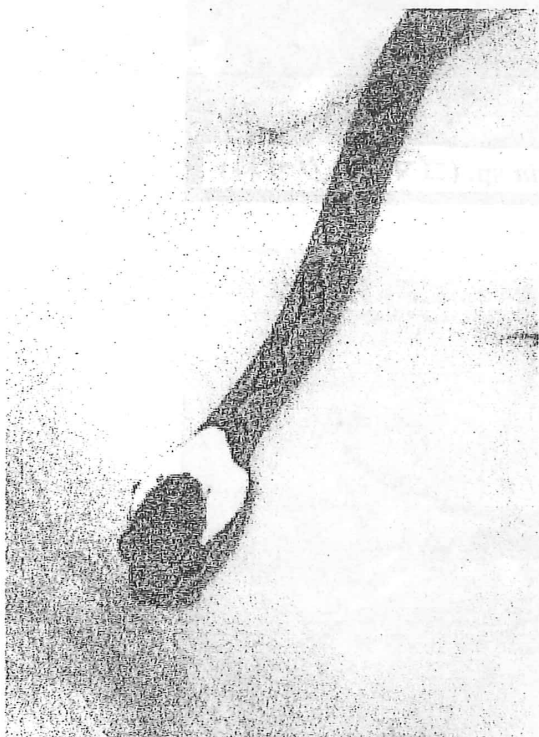


しかし、山を越えて西側に下りると、とたんに景観は一変し、植物が増えてくる。いわゆる雲霧林という独特の森林である。山は濃い緑に覆われて、路傍にはきれいな花をつける植物もたくさんある。車を降りて、採集を始めるとまもなく、円網に占座する *Micrathena* の一種に出会った。腹部に大きな刺をもつくモである。ここが日本ではないことを実感する。また、集団生活をすることで有名なムレアシブトヒメグモの網も見ることができた。

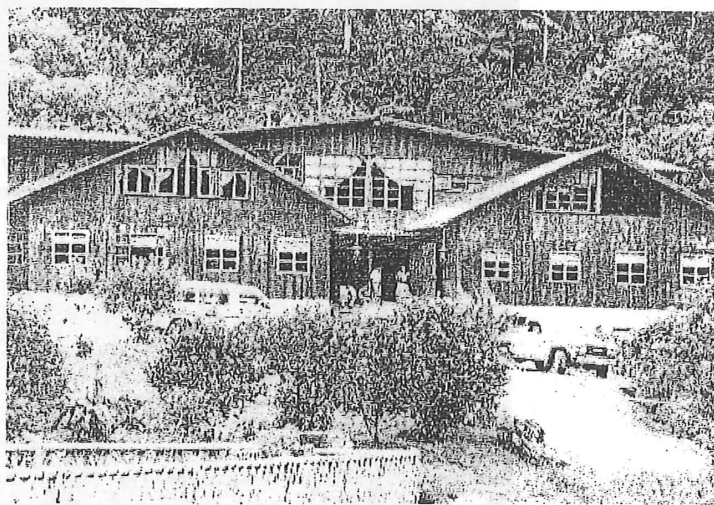
この日の宿はミンドのホテル。しゃれた木造の建物の前方と背後に雲霧林が迫り、閑静なりゾート地という感じのところである。ここに3泊する。このあたりは標高1600 mほど。赤道直下であるが、まったく暑くない。夜は寒いくらいで、寝るときはトレーナーの上下に毛糸のセーターを着て、ちょうどいいくらいであった。

27日は宿舎から車で少し移動して採集。意外にも竹が多く、部分的には日本の風景にも似ていた。しかし、すばやく飛んでいくコバルト色のモルフォ蝶や林道を横断するハキリアリの行列に遭遇し、やはりここが赤道直下の熱帯であることを実感する。

28日は、川沿いで採集できる場所はないかという我々の要望によって、ミンドよりさらに45 km北西に離れた標高400 mほどの林に案内してもらった。小さな流れに沿って採集する。小峰さんがビーティングをしていると、小さなヘビが落ちてきた。ガイドのパブロによると、毒蛇に擬態している無毒の種だそうだ。パブロは爬虫類の専門家なので、そのヘビをうれしそうに持って帰った。今回の旅で、ヘビを見たのはこのときだけだった。



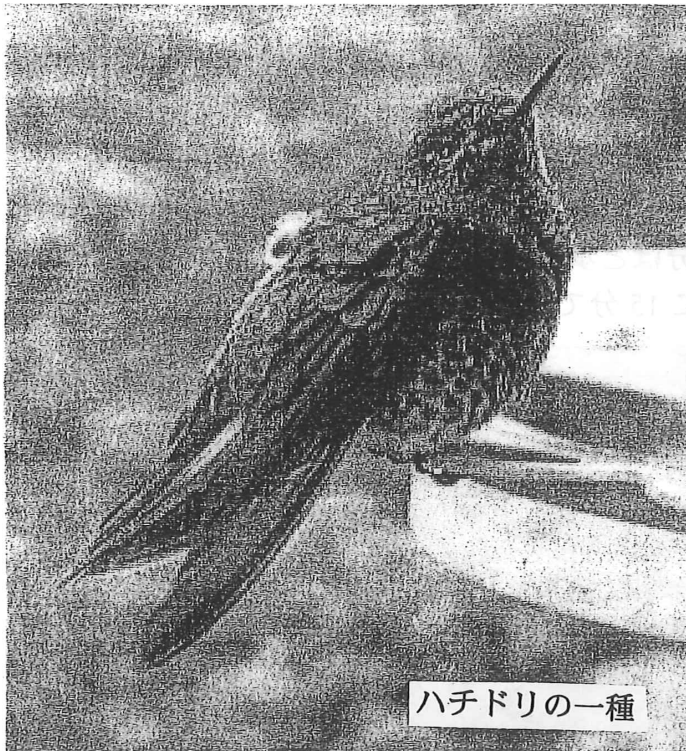
毒蛇に擬態している無毒蛇



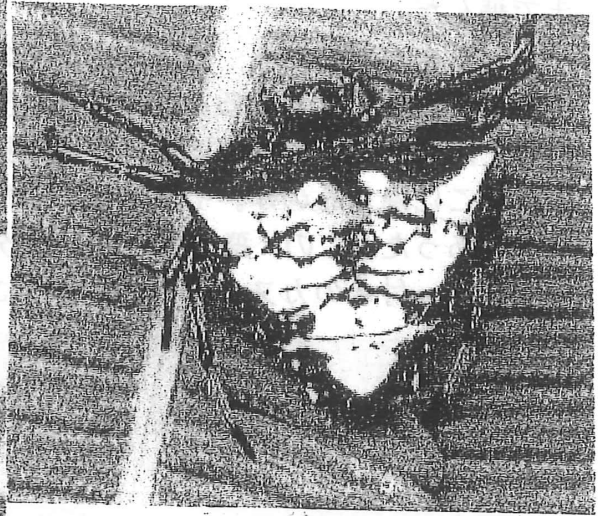
ミンドのホテル

29日は、ミンドでの滞在を終えてキトへ戻る。庭に餌台をしつらえてハチドリを呼び寄せているハミングバード・ハウスがあるというので、そこに行くことにする。途中、林道を走っていると、樹間に円網が目につく。車を停めてもらって、降りて見て

みると、なかなかおもしろい。腹部が三角形のクモが頭を上にして占座している（これは谷川さんによると *Verrucosa* sp. とのこと）。その後も、何度も車を停めてもらいながら採集した。運転手さんは、なんて手間のかかる客なんだろう、と思ったにちがいない。



ハチドリ的一种



Verrucosa sp. (コガネグモ科)

さて、ハミングバード・ハウスは公共の施設ではなく、個人の家である。広いバルコニーからハチドリたちを観察できるようになっている。手前には機敏に飛び回るハチドリ、遠景にはうっそうとした雲霧林が広がり、なんとも心地よい場所であった。

さて、この日はキトに1泊して、翌日からはいよいよアマゾン川源流域に向かう。



カパウイの土の滑走路

●アマゾン川源流 (カパウイ・ロッジ)

目的地のカパウイ・ロッジはアマゾン川の支流のひとつであるマラニョン川のさらに支流の Pastaça 川のほとりにあり、ペルーとの国境近くに位置する (キトの南東約 320 km)。キトから中継地のシェルというところまで行き、そこで乗り換えてカパウイまで飛んだ。

シェルを出発したら、眼下に広がるのは、地平線のかなたまで広がる熱帯雨林である。蛇行する川も見える。その広さに圧倒されつつ、そろそろ到着の時刻だと思っていると、前方の森の中に四角い裸地が見えてきた。そこに近づいていく。ひょっとしてあそこに降りるのか。そう、そのやたらに長ばそい運動場みたいなところが滑走路なのであった。この「飛行場」から 15 分ほど歩いたところに船着き場があり、そこからモーター付きのカヌーに乗ってさらに 15 分で、ロッジの入り口に着く。



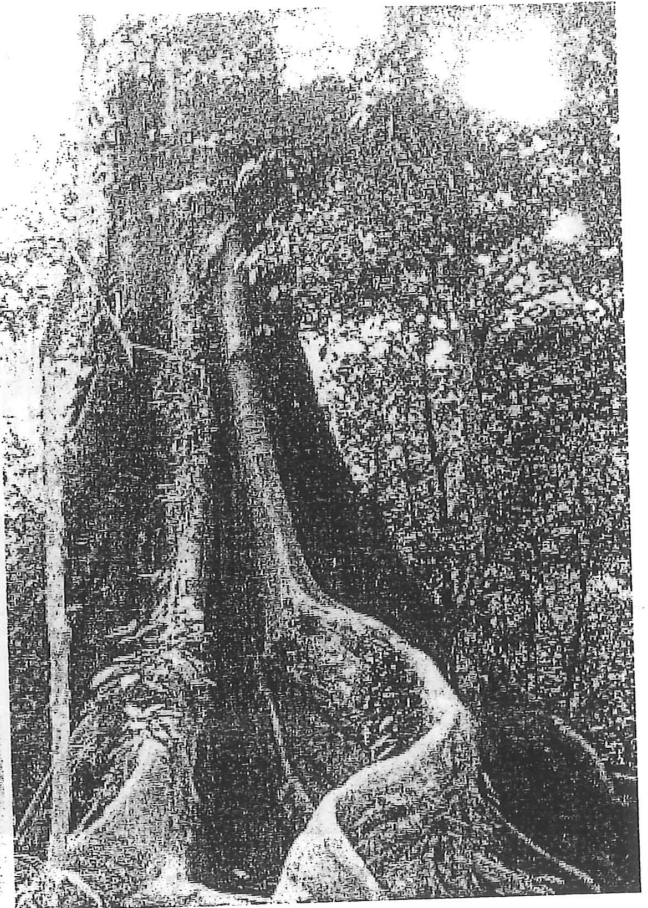
アマゾン川源流

ロッジではまず、オリエンテーションがあった。このロッジの沿革に始まって、ロッジ周辺には原住民であるアチュアル族の集落があること、アチュアル族の人たちはロッジ内でも働いていること、外部との連絡手段としてはセンターに無線があること、太陽光発電を行なっていること、井戸水を濾過したものを飲み水としていること、石鹼は生分解性の高い備え付けのものだけを使わなければならないこと、トイレで使った紙は便器に流してはいけない (横のボックスに入れる) こと、ロッジ内は安全だから部屋に鍵をかける必要はない(!) こと、などなど。

ロッジの中にはバーもあって、ウィスキーやビールが飲める。ジュースは無料である。みやげものも売っている。その中に、小さなミミズクの置物があった。一見したところ、象牙を彫って作ったみたいに見える。しかし、これは Tagua というヤシ科植物の実なのだそう。後で調べてみたら、和名がまさにアメリカゾウゲヤシという植物であった。じつは、これと同じ物は、キトやミンドのホテルでも売っていた。エクアドルでは、けっこうポピュラーなみやげものであるらしい。



Tagua 製のミミズクの置物

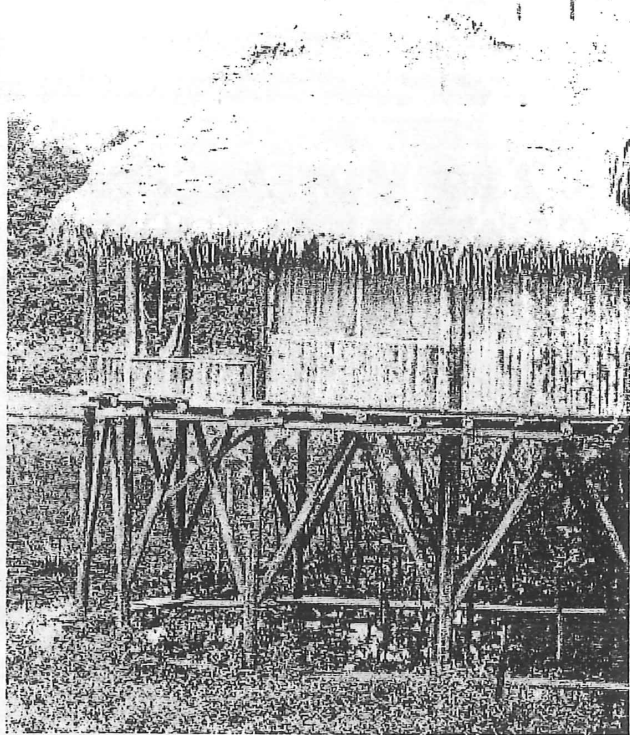


巨大な板根

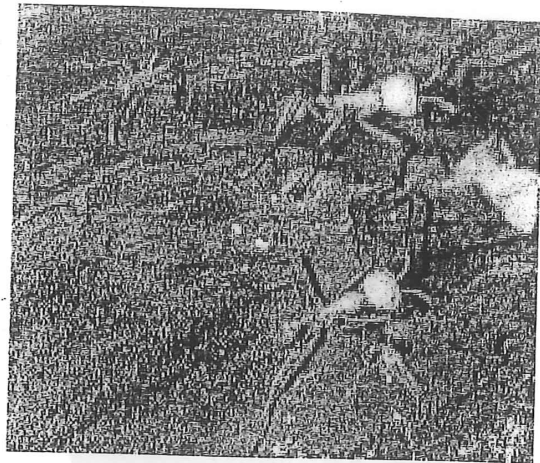
このロッジの周辺には多くのトレイルがあり、ここのロッジ専属のガイドが案内してくれる。本来は、生態系の基礎知識習得コースとかバードウォッチングコースのような、出来合いのコースに参加するシステムであるのだが、我々はクモを探したいので、谷川さんが交渉して、クモ屋だけのコースを設定してもらった。我々についてくれたガイドは2人で、うち1人はアチュアル族の人である。

ここでの移動手段はすべてカヌーである。川の真ん中に出ると、その広さに驚く。ここはアマゾン川の源流域なのに、この広さ！ すばらしい眺めだった。ところで、カヌーに乗るときは必ずライフジャケットを着けるのだが、長年使われているので、何人もの人々の汗がしみ込んでおり、その臭さには閉口した（うちで飼っている猫のオシッコのにおいみたいだった）。

この熱帯雨林で印象的だったものはアリである。大きいものやら、小さいものやらいろんな種類のアリに出会った。なかでもグンタイアリはすごかった。林床で行列をつくっているのを見つけて、1匹の兵隊アリをつまみ上げたら、皮製の手袋に食いついて離れない。湾曲した大顎を食い込ませて、かつ、腹端を曲げて針で刺している。どうしても離れないので、そのままポリ袋に入れて、宿に持ち帰ったところ、夜にはそのままの状態ですべて死んでしまった。彼らは、いったん噛みついたら、文字どおり死ぬまで放さないようにプログラムされているのだろう。



カパウィ・ロッジのキャビン



グンタイアリの一種

キャビンにはコウモリが住んでいた。ここのキャビンはアチュアル族の家屋を模して作られている。屋根はヤシの葉で葺いてあり、その屋根の隙間にコウモリが住んでいるのである。夕方になると、屋根の端から次々にコウモリが飛び出していく。たまたま夜明けに目がさめた時に見ていると、コウモリが帰ってきて、屋根にもぐり込んでいく。なんともかわいらしかった。

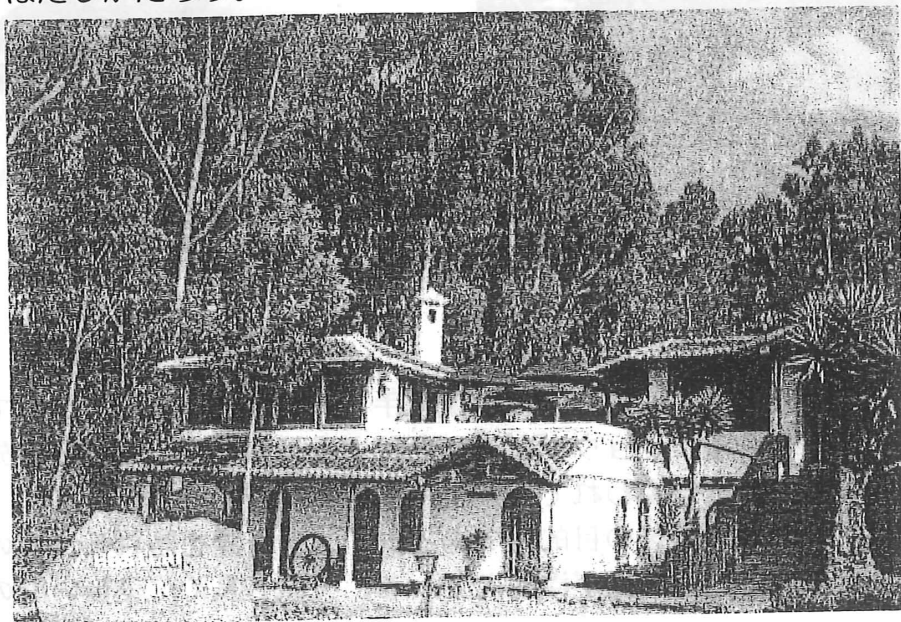
クモに関しては、造網性の種についてはおもしろいものがたくさんいた。なかでも、夜間観察のときに発見した「逆はしご網」の幻想的な美しさには感動した。さらに、集団生活をするウズグモやこしき部分にコップ型のリトリートのある円網なども見た。しかし、地表徘徊性のクモは少ない。コモリグモもたまにしか出てこない。要するに、地面にはアリが多くて、他の小動物はあまり高密度には生息できないようなのである。

ところで、熱帯雨林は意外にもあまり暑くない。たしかに、日中はある程度暑いですが、夜はとても涼しいのである。寝るときは、Tシャツ、半ズボンに薄い毛布をかぶってちょうどよかった。日本の寝苦しい夜を考えるとうそのようだった。アマゾンに避暑に行ったようなものである。

また、蚊が多いことを覚悟していたのだが、これもほとんどいなかった。カヌーがトレイルの入り口に着いて、我々の一人が蚊取り線香に火を付けていると、ガイドが興味深そうに見ている。彼は、蚊取り線香を見たのは初めてだという。そして、日本ではそんなに蚊が多いのかと聞くので、とても多いと答えると、気の毒そうな顔をされてしまった。

●カヤンベ山

カパウイで4泊し、8月3日はキトの北東50 kmほどの町、カヤンベに移動する。飛行機の都合で、2班に分かれて、時間をずらして出発することになった。我々クモ屋は先発班。これは、中継地のシェルでの待ち時間にクモ採集ができるので、そのほうがよからうという配慮によるものだった。いつもより少し早く起きて、土の滑走路を飛び立ち、無事にシェルに到着。川の近くに移動して採集した。しかし、ここでアクシデント。吉田さんが荷物を置き引きにあってしまったのだ。ここでは私もクモに気を取られていたので、私の荷物が無事だったのは、ただ運が良かったというほかはない。それまで滞在していたカパウイがあまりにも平和なところだったので、気が緩んでいたのはたしかだろう。



カヤンベのホテル

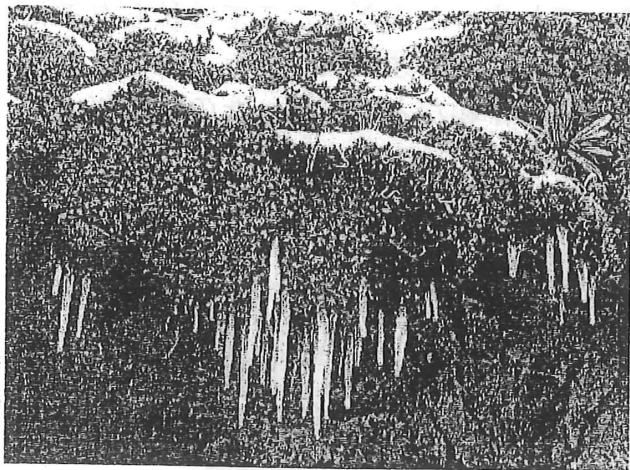
ともかくも、キトに戻り、夕方にカヤンベに到着した。このホテルは、広い敷地内にこぎれいな建物が並んでいて、なんとなくスイスのような感じである(もともと、スイスには行ったことはないけど)。ここは標高約2800 mで、涼しい、というより寒い。部屋には暖炉があって、戸口の横には薪が積んである。頼めば暖炉に火を入れてくれるとのことなので、頼んでこれが正解。うーん、あったかい。でも、8月に赤道直下に行って、暖炉にあたるとは思わなかった。

ところで、カパウイに残してきた他のメンバーはどうなったかというところ、我々が出発してから、現地では大雨が降って、結局、その日は飛行機が飛ばずに、カパウイにもう1泊することになったのであった。なにせ、土の滑走路だから、ぬかるんだらどうにもならないのである。(彼らは翌日の夕方にカヤンベに到着した。)

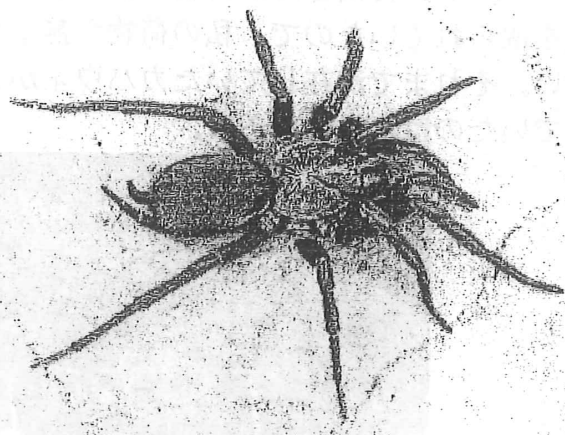
8月4日は、カヤンベ山へ行く。車は市街地を抜けて、いなか道に入り、どんどん山を登っていく。遠くに雪をいただいた山が見える。雪のあるところまで行くらしい。山道では、大きな荷物を担いだ人とたくさんすれ違う。聞けば、氷を運んでいるのだという。じつは、この日はちょうど、氷運びのお祭りの日だったのである。山の上で氷を取って、大きな氷を早く町まで運び降ろすことを競うらしい。かつては実用的な

意味があったわけだが、現在はそれがお祭りになっているのである。しかし、この標高 4000 m の高地で一抱えもあるような氷を担いで走るなんて、その心肺機能のすごさには恐れ入る。

結局、我々は 4200 m あたりまで登った。雪も降っていて、とにかく寒かった。しかし、ここは赤道直下。この地のように、赤道付近でありながら雪が積もるような場所は、地球上できわめて少ないのである。



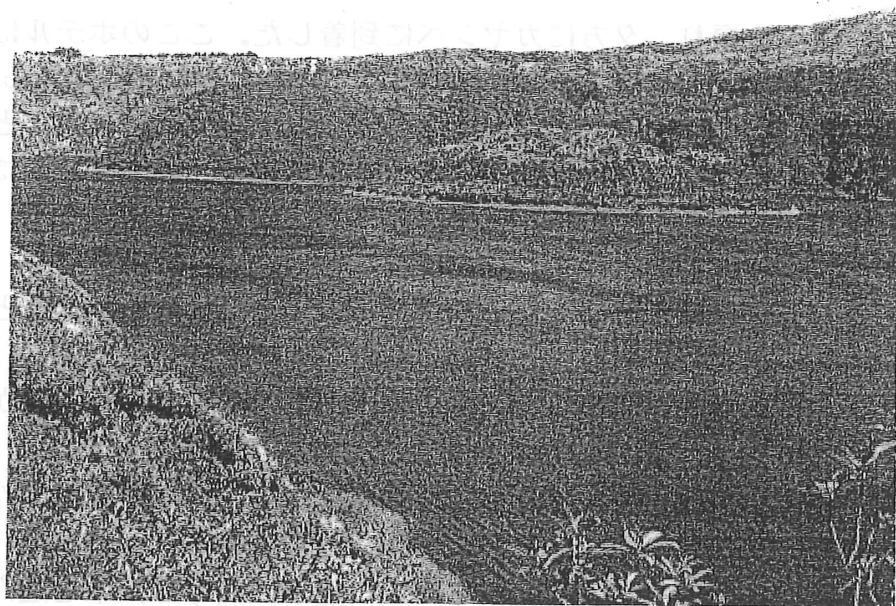
カヤンベ山で見たつらら



ジョウゴグモの一種

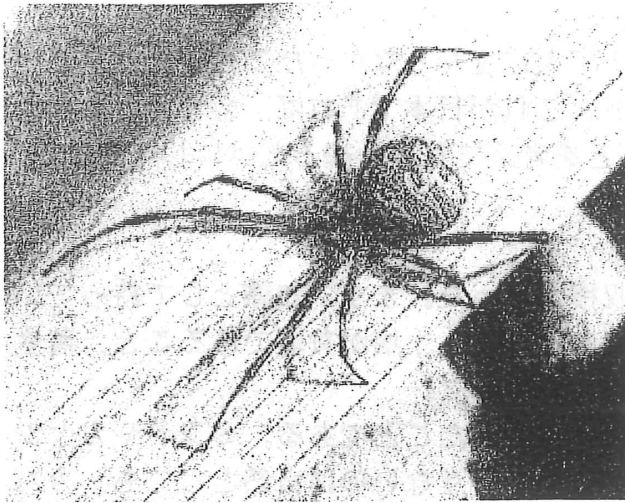
この日の帰途、標高 3000 m あたりで、運転手さんがクモの網を見つけて停車してくれた。乾燥した路傍の崖にジョウゴグモがたくさん造網している。草の先でちょんちょんと網をつつくとクモが現われて、うまく採集することができた。

翌 8 月 5 日は、この旅の最後の目的地であるクイコチャ湖を訪れる。この湖は典型的なカルデラ湖で、湖面には小島が浮かんでいる。天気も良く、美しい湖の景色を楽しんだ。

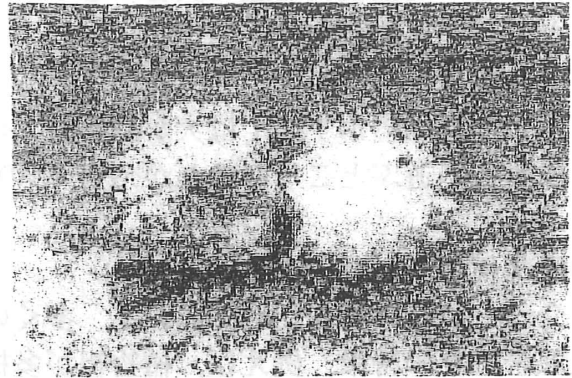


最後に、車道沿いの河原で少しだけ採集をした。川の水は濁っており、河原はほこりっぽく、ブユだけがやたらに多い場所だった。たいしたもの採れないと思ったが、

ここで船曳さんがハイイロゴケグモを見つけた。コンペイトウ型の特徴的な卵囊も確認できた。このように乾燥して植生が貧弱な環境が、このクモの本来の生息場所であるらしい。これもひとつの収穫であった。



ハイイロゴケグモ



ハイイロゴケグモの卵囊

これで、楽しかった旅もすべて終わった。この日の夜は、キトのレストランで、お世話になったガイドさんたちと夕食をともにして、午後 11 時 25 分にキトを飛び立った。

●治安と病気のこと

こんな機会はめったにないだろうと思って、今回の旅行への参加を決めたものの、出発するまでは少なからず不安があった。ひとつは現地の治安のことである。パスポートセンターで情報を確認してみると、エクアドル国内の州によっては、凶悪犯罪多発や隣国コロンビアの反政府ゲリラの出没によって、観光旅行延期勧告が出ており、エクアドル全土は、「注意喚起」ということになっていた。しかし、実際はどうだったかということ、とくに身の危険を感じることもなく、無事に戻ってきたのである。もちろんこれは、事前に入念な準備のもとに、危険な地域を避けて旅程が組まれていて、かつ、つねにガイドが同行してくれていたおかげである。この点、旅行団の実行委員の方々や現地スタッフに感謝のほかはない。

そして、もうひとつの心配は病気のことであった。事前に送られてきた資料によると、この旅行では、規則のうえでは予防接種は義務づけられていないとのことであったが、やはり、万一のことを考えて、A型肝炎、狂犬病、破傷風、黄熱病の予防接種を受けた。とはいえ、マラリアやデング熱のようにワクチンがない病気もあるし、標高が高いところでは高山病もあるなどと聞かされて、心配だった。しかし、これまた、実際の健康上のトラブルといえば、少々の下痢くらいのものであった。

もっとも、下痢については覚悟はしていた。当然、生水を飲まないように気をつけて、歯磨きのあともミネラルウォーターか持参した湯沸し器で煮沸した水を使った。ただ、問題なのは、生ジュースや果物である。市販のガイドブックには、こういったものも危ないと書かれているが、ジュースはほとんどの食事に出てくる。最初はちょ

っと、びびっていたのだが、これをすべて避けていたら、ちっともおもしろくないので、適当に飲むことにした。そのせいかどうか分からないが、案の定、現地で2回と成田に着いた直後にお腹の具合が悪かった。しかし、用意していた薬を飲んだらすぐになおってしまった。

少々残念だったのは、狂犬病のことを考えて犬にさわらなかったことである。ミンドとカヤンベのホテルでは犬が飼われていた。これが日本であれば、必ず犬をいじくりまわして遊ぶところなのだが、もしものことを考えて写真を撮るだけにしておいた。

●熱帯雨林というところ

今回、熱帯雨林を初めて訪れて、多くの収穫があった。まず、知識として持っていた熱帯雨林の特徴、例えば、植物相が多様であること、土壌が貧弱であること、着生植物が多いことなどを自分の目で確かめることができた。

一方、意外だったことは、気温がさほど高くなかったことである。ミンドやカヤンベは赤道直下とはいえ、ある程度の標高があるから暑くないのは当然としても、カパウイは標高300m程度なのだからもっと暑いはずではないのか。しかしこれは、大阪でも夏はあれだけ暑いなのだから、赤道直下の熱帯雨林なら、とんでもなく暑いはずだという、ただの思いこみだったのである。たしかに、赤道付近は太陽から受ける年間の熱エネルギー総量が地球上でもっとも多い地域であるのだが、それは必ずしも温帯の夏よりもつねに気温が高いということではないのであろう。

もうひとつ、意外(というより、ちょっと期待はずれ)であったのは、昆虫やクモが想像していたほどにはいなかったことである。色とりどりの蝶や甲虫やクモが、わんさかいるかと思っていたが、熱帯雨林というのは動物に関しては、さほどにぎやかではなかった。もっとも、我々は広大なアマゾン熱帯雨林の中のほんの点のような場所に、たった数日間滞在しただけであるから、場所や季節が異なれば、また違った様相を見ることができるのであろう。とはいえ、今回の旅で出会った生き物たちは初めて見るものばかりで、すべてが新鮮だった。

この旅行から帰ってからは他の仕事がやたら忙しくて、すでに半年近くが経つのに、未だにクモの標本の整理ができていない。造網性のクモには、けっこうおもしろいものがたくさんあったが、地表徘徊性のクモは概して少なかった。シフティング用のザルも持っていったが、基本的に落ち葉が少ないから、それを活用する機会すらあまりなかったのである。私が大好きなワシグモの仲間も結局、全然採集できなかった。しかし、こうして現地での日々を反芻していると、そんなことは別にどうでもよいと思えてくる。熱帯の自然の中で2週間を過ごしたことだけで、今は十分に満足なのである。

都心部の公園・城址・神社などで減少したクモ

～名古屋市現状～

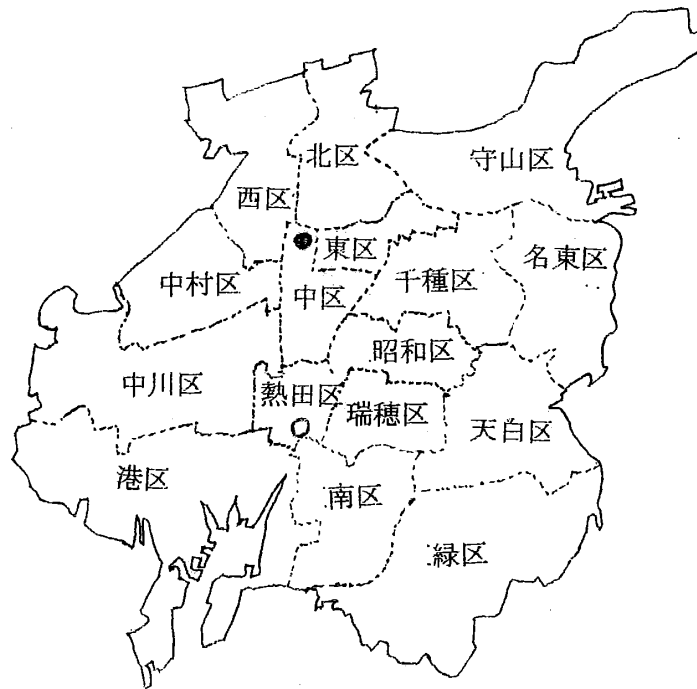
須賀瑛文

はじめに

最近、名古屋市内都心部のクモを調査する機会が多くなった。まずは、1998年から1999年にかけて名古屋城内（中区）を緒方清人さんと調べた（緒方清人・須賀瑛文：名古屋城庭園内のクモ類と多足類, 蜘蛛 No.34, 2001）。その後、名古屋市のレッドデータブック作成のための調査で、1999年から2001年にかけて、熱田神宮付近（熱田区）や名城公園付近（北区）を何回か歩いた。その結果、かつてはこれら都心部の公園・城址・神社等に比較的多く見られた大型のクモの数種が、極端に減少しているように思われたので所感の一端を記しておくことにした。

●キシノウエトタテグモ

このクモに関しては、1984年ごろ調査したことがある。当事のフィールドノートを見ると、名古屋市の中心部中区にある名古屋城の石垣に「僅かに生息、ほとんどが空巢」と記入されている。また、熱田神宮近くの高蔵公園でも確認している。この調査は1985年に報告（須賀：愛知県のトタテグモ類, 蜘蛛 No.19, 1985）したが、なぜか名古屋城の記録はこの報告から脱落している。また、同じ80年代、中区大須の那古野山公園でも生息が確認されている（永井均：興正寺のクモ(1)蜘蛛 No17, 1983）。



図：名古屋市区分図 【●名古屋城 ○熱田神宮】

さらに、手元にある 1984 年発行の子供向けの絵本、「虫をたおすキノコ」(大日本図書)の中に、筆者吉見昭一氏は、「わたしのクモタケをさがす範囲も、京都の円山公園・銀閣寺・清水寺から名古屋の熱田神宮、奈良、三重、香川、徳島、高知県、……としだいにひろがっていきました。東京の高尾山、九州の太宰府天満宮にも……。」
「この結果、現在のところ、クモタケは西日本を中心に発生することがわかりました。これは、トタテグモ(筆者註：キノコトタテグモ)の生活する地理的分布を調べると、重なりあう地域になるかもしれません。」と記しているの、名古屋の熱田神宮にもかつてはクモタケが発生するほど住んでいたようである。しかし、1984 年の調査では発見することはできなかった。

2001 年現在、名古屋市都心部で細々と残っているのは、今回の調査で再発見した名古屋城内の数個体と熱田神宮近くの高蔵公園(高蔵神社の東に隣接)の数個体になってしまった。市内の東部丘陵地、昭和区・千種区には、もう少しましな集団が残っているのが救いではあるが、これも年々減少の傾向にあり心配である。

本種は環境省のレッドリストでは準絶滅危惧種(NT)にランクされている。しかし、以上の激減の現状から、愛知県では絶滅危惧 I B 類(EN)にランクする予定である。

●カネコトタテグモ

都心部では、1989 年名古屋城庭園に多数生息しているのを確認している。ところが、今回の名古屋城内庭園の調査では極端に住居が減少、小さな個体が僅か確認されただけであった。数年後、どうなるかが心配である。ちなみに、周辺部の千種区東山公園付近の集団も現在では見られなくなってしまった。

なお、本種の環境省のレッドリストのランクは準絶滅危惧種(NT)である。愛知県のリストでは、絶滅危惧 I B 類にする予定である。

●ジグモ

このクモは、かつては都心部でも、神社仏閣など立木の根本や灯籠・塀の下などでは、ごく普通に見られたものである。ところが、最近、名古屋城内庭園・熱田神宮神域・高蔵神社境内・名城公園などを歩いても探すのが困難なほど、その住居が少ないのである。その後、都心部の別の公園などを歩いてみたが、その住居は皆無あるいはごく僅かであった。大げさにいうならば、これらの公園などの小地域に限ってみると絶滅危惧種?に値する。もっとも、都心の民家の庭などは覗くことができないので現状は分らないが、そこではまだ安泰なのだろうか。ちなみに、我が家の狭い庭には何十という住居が見られるし、秋田在住の福島彬人さんの庭には 228 個ものジグモの巣があるという(いとゆう：第 80 号, 2001)。

都市公園等と民家の庭でのこの差は一体何が原因なのだろうか。行き過ぎた落ち葉の清掃、焼却・草取りや土地の乾燥化か、はたまた除草剤・殺虫剤などの使用か。蛇足かもしれないが、我が家の庭では除草剤・殺虫剤は使わないし、清掃も行き届かないのが現状である。

●ワスレナグモ

ワスレナグモは環境省のレッドリストでは、準絶滅危惧種にランクされているクモ

である。1980年代、名古屋城にトタテグモの調査に訪れた際、このクモやその住居をたくさん見たのを覚えている。しかし、今回の名古屋城内庭園の調査では、まったく住居らしいものを認めることができなかった。僅かに、緒方さんが放浪中の雄を採集しただけ。このクモも、減少の一途をたどっているクモである。ちなみに、かつてこのクモを観察したいときは、当事の住居近くにある城山神社（千種区）を訪れるとたくさん住居があったことを思いだして行ってみたが、ここも名古屋城と全く同じ現状であった。前記、トタテグモ類・ジグモ同様、地表近くに住むクモの減少傾向の原因ははたして何なのだろうか。

本種は、愛知県のレッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類（VU）にランクする予定である。

●ナガコガネグモ

名古屋城庭園内のクモを調査して不思議に思ったことがある。それは、造網性（夜行性以外）の普通種のクモが少なかったことである。とくにお堀に面した草地にたくさん見られたナガコガネグモが、まったく姿を消してしまったのである。その後調査した、隣接する名城公園も、お堀に面して草地が残っているのであるが見ることができなかった。草刈りなど、行き届いた公園管理なども一因かも知れない。しかし、都市部での造網性クモ減少の真の原因ははたしてなんなのだろうか。ちなみに、かつて住んでいた昭和区の山崎川沿いには、たくさんナガコガネが住んでいたが、これも姿を消してから20年にもなり、今では全く見られなくなっている。

●コガネグモ

本種も2001年現在、名城公園のような都市公園には全く見られなくなってしまったクモである。また、名古屋城庭園内でも見いだすことはできなかった。かつては、名古屋城のお堀に面した明るい草地や雑木の間には、割合に見られたのであるが今では姿を消してしまったのである。

なお、このクモは、名古屋市内は勿論、愛知県全体を眺めても、以前に比べてすいぶん減少しているものと思われる。このため、愛知県のレッドリストでは準絶滅危惧種（NT）にランクする予定でいる。

おわりに

都市公園など都心部で減少したクモ6種について、名古屋市の現状を簡単に記した。これらのクモが減少した真の原因については不明な点が多い。関西クモ研究会員の中心地、大阪・京都・神戸の都市公園ではどうだろうか。ご教示頂ければ幸甚である。

兵庫県のセアカゴケグモ通信 2001 年版

清水裕行

兵庫県内におけるセアカゴケグモの生息に関しての報告は、1997 年の西宮市内での 2 例が最初であるが、その後しばらくは新たな報告がなかった。2000 年になって、阪神地方（大阪湾岸）の 3 ヲ所の埋め立て地あるいは再開発地で合計 1044 個体が発見され、本種が県内に定着した可能性が示唆された。2001 年夏には、前年の生息地から越冬・繁殖したと思われる個体群が確認され、定着が確実視されるとともに、神戸市の内陸部でも新たな生息地が発見された。昨年の報告に続き、今回も新聞報道を中心に知り得た情報を紹介する。

今回の報告に際しては西川喜朗氏と新海明氏より貴重な資料の提供を受けた。ここに明記して感謝の意を表したい。なお、私は昨年から今年にかけて現地へ赴き、生息状況を調査したが、これについては改めて報告したい。

1. 前年の発見場所で定着の兆し

2001 年 6 月 19 日、兵庫県は阪神地方を 4 月から 6 月にかけて調査した結果、前年に生息が確認されたのと同じ場所でセアカゴケグモ合計 84 個体を捕獲したと発表。生息数は前年に比べると少数で、生息範囲の拡大も認められなかったとのこと。確認地点は以下の通り。

(1) 神戸市中央区の「なぎさ公園」と同区 9 丁目（ポートアイランド）の「K-CAT（神戸航空旅客ターミナル）駐車場」から合計 13 個体。

(注) ポートアイランドからの記録については 2000 年の新聞では報道されていなかった。新たな生息地なのか、私が新聞記事を見逃しているのかは不明。なお、神戸新聞（1-1）は「昨年十二月の調査では成虫が約千二百匹発見されている」と述べている。「1200」が 1 度の調査の結果ならば後述する神戸市西区の結果に匹敵するので、それまでの複数ヶ所の合計と考えられる。それでも、2000 年 11 月までの 3 市の合計（1044 個体）よりも約 100 個体多い。改めて昨年末の新聞を確認しておくつもりである。

(2) 西宮市 4 丁目の県営住宅駐車場付近から 45 個体と卵囊 19 個。

(3) 芦屋市町の空き地から 26 個体と卵囊 34 個。

(4) 尼崎市内でも調査が行われたが、今回もセアカゴケグモは発見さなかった。

[新聞記事] 新聞名, 日付, 号, 頁, 版, 見出しの順。‘/’ は見出しの区切りを示す。

1-1. 神戸新聞, 2001. 6. 20 (37193 号), p. 27 (兵庫版). 「セアカゴケグモ/県が生息調査/3 市で 84 匹」

1-2. 毎日新聞 (大阪本社), 2001. 6. 20 (42610), p. 27 (神戸版). 「神戸、芦屋/西宮 3 市で/セアカゴケグモ 84 匹駆除/県『素手で捕まえないで』」

1-3. 毎日新聞 (大阪), 2001. 6. 20 (42610), p. 27 (阪神版). 「今年も発見/セアカゴケグモに御注意!!/神戸、芦屋、西宮 3 市で/県 84 匹駆除」[本文は神戸版と同

じ]

1-4. 産経新聞 (大阪), 2001. 6. 20 (21067), p. 27 (兵庫総合版). 「臨海部にセアカゴケグモ/神戸/西宮/県、注意呼びかけ」

1-5. 読売新聞 (大阪), 2001. 6. 20 (17410), p. 31 (神戸版). 「セアカゴケグモ/84匹見つかる」

1-6. 読売新聞 (大阪), 2001. 6. 20 (17410), p. 31 (阪神版). 「セアカゴケグモ 84匹確認/4-6月中旬/西宮、芦屋、神戸で調査」 [本文は神戸版と同じ]

1-7. 朝日新聞 (大阪), 2001. 6. 21 (43007), p. 25 (阪神版). 「セアカゴケグモ/西宮・芦屋で70匹駆除」

(注) 他紙より1日遅れの掲載。また、なぜか神戸市の記録には触れていないので、総数(厳密には71個体)が他紙と一致しない。従って、このニュースは神戸版には掲載されていない。一方、本紙だけが写真(西宮市で捕獲の成体と卵囊)入りであった。

2. 神戸市の内陸部で初めて発見

神戸市生活衛生課は8月8日に、同市西区町の「井吹台東公園」で成体約1500個体と卵囊約1200個を発見して駆除したと発表。5紙のほか、スポーツ紙等でも報道。

この数値は側溝の格子蓋の数から割り出した概数と思われる。

2-1. 朝日新聞 (大阪), 2001. 8. 9 (43055), p. 29 (13版). 「セアカガケグモ1500匹と卵駆除/神戸」 [1個体の写真]

2-2. 神戸新聞, 2001. 8. 9 (37242), p. 22 (神戸版). 「セアカガケグモ西区で大量発見/公園立ち入り禁止/市、回覧で注意呼び掛け」 [公園の東側入口と1個体の写真]

2-3. 神戸新聞, 2001. 8. 9 (37242), p. 25 (14版). 「神戸・西区の公園/セアカガケグモ1500匹/確認例では県内最多/市が駆除、卵1200個も」

2-4. 毎日新聞 (大阪), 2001. 8. 9 (42660), p. 27 (14版). 「セアカガケグモ1500匹発見、駆除/神戸・西区」 [15版の見出し・内容ともに同じ]

2-5. 産経新聞 (大阪), 2001. 8. 9 (21116), p. 22 (神戸版). 「セアカゴケグモ/西区で1500匹発見、駆除」 [公園の西側入口の写真]

2-6. 読売新聞 (大阪), 2001. 8. 9 (17459), p. 34 (13版). 「セアカゴケグモ/毒グモ1500匹/神戸・西区/ニュータウン公園/市が駆除」 [神戸市役所で撮影した標本の写真; 14版の見出し・内容ともに同じ。ただし、写真には異なる標本を用いている]

2-7. スポーツ報知 (大阪?), 2001. 8. 10, p. 8 (7版). 「毒グモ1500匹/カズが危ない/神戸のグランド隣の公園に大量発生」

(注) 「カズ」はプロサッカー選手の三浦知良氏。チームが使用しているグランドが公園と道を隔てた東隣にある。このグランドから本種が発見された、あるいは選手等に被害がでたという情報は現在のところつかんでいない。この記事は西川喜朗氏より御提供いただいた]

3. 神戸市西区の別の場所でも発見

神戸市は、井吹台東公園から南へ約 2.5km にある神戸市営地下鉄「伊川谷駅」の駐車場（地上）から 8 月 10 日に約 300 個体と卵囊約 500 個（いずれも推定）を発見したと発表。朝日を除く 4 紙が報道。

3-1. 神戸新聞, 2001. 8. 11 (37244), p. 26 (15 版). 「セアカゴケグモ／神戸・西区でまた 300 匹発見」

3-2. 毎日新聞（大阪）, 2001. 8. 11 (42662), p. 23 (神戸版). 「セアカゴケグモ 300 匹、西区で発見」

3-3. 読売新聞（大阪）, 2001. 8. 11 (17461), p. 30 (13 版). 「毒グモまた神戸で 300 匹」

3-4. 読売新聞（大阪）, 2001. 8. 11 (17461), p. 30 (14 版). 「毒グモまた神戸で 300 匹」 [本文は 13 版よりやや簡略]

3-5. 産経新聞（大阪）, 2001. 8. 11 (21118), p. 22 (神戸版). 「セアカゴケグモまた西区で発見」

4. 他地域でも注目

阪神地方での発見が相次いだ。これまでは主として一般紙の地方版が扱うローカルニュースの観があり、他地方のクモ研究者の目にもとまらないことが多かったようだった。今回の神戸市西区での発見例では個体数が多いためか、久しぶりに全国的に注目され、特集記事を組んだ新聞・週刊誌もある。

4-1. 東京新聞, 2001. 8. 15 (21159), p. 12. 「『こちら特報部』セアカゴケグモに気をつけて／神戸で 1800 匹を発見／ハチに似た毒性／全身ショックの危険も／コンテナで上陸…『横浜説』？」

（注）井吹台と伊川谷を合わせて報じた特集記事。写真は 2 葉で神戸新聞と全く同じ。通常、地方新聞は相互にこのように情報を交換している様子である。大阪市立自然史博物館の金沢至学芸員の談話があるが、これは本紙独自の取材のようである。見出しの『横浜説』は神戸市の個体群が横浜経由で侵入したという意味ではなく、関東への侵入の可能性について述べたもの。この記事は新海明氏より御提供いただいた。

4-2. 週刊文春, 2001. 9. 13=43 (34), p. 47. 「神戸の普通の公園に／「毒グモ」千五百匹も増殖中」 [井吹台東公園南西部と神戸市が配布したちらしの写真. 池田博明氏の談話]

（注）やや不正確な表現がいくつかある。まず「1500 匹も増殖中」で、これだけの個体数がいまだ健在であるような印象を受けるが、西区の 2 ヲ所で発見された個体はすべて駆除された。生き残りが増殖を再開するかは今後の課題である。「1500 匹」は、東京新聞と同様に、井吹台東と伊川谷の合計であるが、本誌は「市内西区の二カ所」と明記していながら、井吹台東だけで「成虫約千五百匹と卵約千二百個」としている（卵囊の数は正解）。「臨海部以外での発見はこれまでに例がない」も誤り。大阪府では東大阪市と八尾市（大阪湾から 10km 以上内陸）で確認されており、県内でも西宮市の東山台（約 12km）で 1 頭が発見された（東山台ではその後確認されていないので、水際駆除に成功したものと思われる）。

いずれも、7km程度の井吹台より内陸部である。なお、「公園に隣接する分譲住宅の輸入建材にくっついてきたとしか考えられへん」という池田氏の談話がある。この表現からは、池田氏が西区の個体群が、大阪府経由ではなく、海外から直接渡来したとみておられるように受取れる。この見解については別の機会に述べるとして、この会話は奇妙に感じる。池田氏は神奈川県在住で、関西の出身とは聞いていない。「神戸で発見」という事実と結びついた編集者の錯覚であろうか。

5. 西宮市での継続調査

西宮市は2001年9月19日に、同月1, 15, 17日の3日間西宮浜4丁目を調査した結果、成体332個体と卵囊203個を発見・駆除したと発表。同市環境衛生課は、前年の同時期(751個体, 卵囊718)より捕獲数が半減したこと、生息区域が拡大していないことから駆除活動の成果が現れたと判断している。

5-1. 朝日新聞(大阪), 2001. 9. 20(43095), p. 29(阪神版). 「セアカゴケグモ332匹を駆除/西宮市」

5-2. 神戸新聞, 2001. 9. 20(37282), p. 24(阪神版). 「セアカゴケグモ/330匹発見/西宮浜で調査」

5-3. 毎日新聞(大阪), 2001. 9. 20(42702), p. 31(13版, 14版). 『雑記帳』[コラムなので大阪本社発行の全版に共通と思われる]

5-4. 産経新聞(大阪), 2001. 9. 20(21156), p. 26(阪神版). 「セアカゴケグモ332匹駆除/西宮市が分布調査/住民に注意よびかけ」

5-5. 読売新聞(大阪), 2001. 9. 20(17499), p. 27(阪神版). 「セアカゴケグモ332匹発見/西宮浜/卵のう203個も/市が駆除」

6. (参考) 大阪府泉南市で男性が噛まれる

11月1日、大阪府は泉南市市内の会社に勤める50代の男性が10月29日にセアカゴケグモらしいクモに噛まれたと発表。男性は痛みを感じただけで、はれやしびれなどはなく、間もなく回復したという。この男性が噛まれた周辺の側溝から10数匹を発見して駆除したという。日本国内で人が噛まれたのは1997年の関西空港での事例に次いで2例目。

6-1. 朝日新聞(大阪), 2001. 11. 1(43136), p. 13(夕刊4版). 「セアカゴケグモ十数匹/泉南」

6-2. 日刊スポーツ(大阪), 2001. 11. 2(18515), p. 29(13版). 「セアカゴケグモに50代男性刺される/大阪・泉南市」[「刺される」は当然、「噛まれる」とすべきである。このような表現はこれまでもしばしば見られた]

(注) この記事は他紙にはなかった。朝日新聞系のスクープか。

京大理学部附属植物園
【京都市左京区北白川追分町】

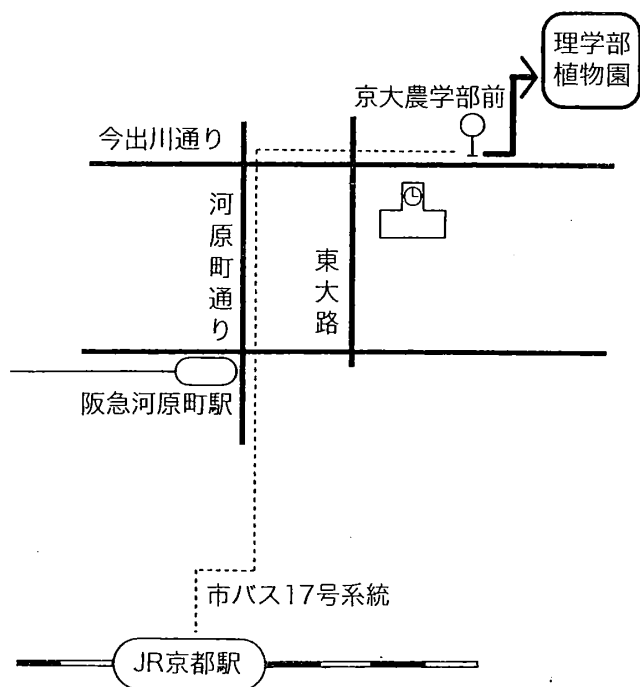
渡部 健

私が今回紹介するのは、京都大学理学部附属植物園です。フィールドというにはおこがましいかもしれませぬ。京都大学のキャンパス内にある、庭園と呼びたくなるほどの狭い一画です。ですが、植物園として園丁さんが手厚く世話・管理しており、しっとりとした良い雰囲気の良い林があります。園内には水が引き入れられて、小規模ながら、池や湿地などの水辺の環境も維持されています。植物の多様度を反映してのことなのか、この植物園で採集されるハナバチ類の多様度は、周辺の山裾などよりも高いそうです。この植物園を調査地にして研究をしている学生・教官は案外と多く、よく見ると、園内の様々な場所に昆虫のトラップが仕掛けられていたり、木の葉一枚一枚にラベルが貼られていたりします。

私自身が、カタハリウズグモの研究をしたのもこの植物園で、3年間、シーズン中(3月初旬から11月下旬)はほぼ毎日、園内の調査地を見回りました。学内にあって、研究室から歩いて10分足らずという便利さがあればこそ出来たことでした。動物の生態を研究するうえで、とにかく毎日、対象と向き合うということには大きな意味があると考えています。一年を通して環境の変化が著しい地域に棲む生物は、そうした季節変化に対応する知恵を発達させている場合が多いものです。ですから、環境についてもより詳しく知りたくなってきます。そんなとき、同じ園内で花にくるハナバチ相を調べている人がいたり、カラスの巣を見ている人がいたり、キノコを調べている人がいると、大きな視点で季節の推移を知ることが出来ます。「自分で見つけた、誰も訪れないとおきの場所」も素敵ですが、みんなが集う場所だからこそその利点もあるわけです。また、植物園では気温や湿度の継続データも手にはあります。

植物園は開放されていて、近所の人も自由に散歩しています。珍しいウモがいるわけでもなく、人くさい場所ではありますが、じっくりと研究するフィールドとして便利な場所ではあります。難点は、夜間になると、どこからともなく野良犬が現れること。突然、茂みから吠えられたりして肝を冷やしたこともしばしば。ご注意ください。

交通としては、京都市バスの17号系統に乗り、「京大農学部前」で下車すれば、そこから歩いて5分です。



夜の自然観察，やっぱり主役はクモ！

本庄四郎

竹野町公民館の自然教室をはじめてもうかれこれ17年になろうとしている。海山川と多自然な町なので、この間、ずいぶんいろんなことをしてきたが、今回吉田先生から「クモ観察会について書いて欲しいんだけど」と頼まれたので初めて投稿させていただく。

夏休みの皮切りに兵庫県のサマースクールが始まる。メインは海でのスノーケリングによる自然観察だが、2泊3日の間にはいろいろ仕掛けを組み込まねばならない。そのひとつが、初日のナイトハイキングだ。5、6年の小学生と中学生の合わせて36名。今年は男子が3分の2だ。初対面同士のアイスブレイクの意味も込めて必ずこのメニューは入れることにしている。

夕食後、全員懐中電灯を手に宿舎近くの自然観察路をゆっくりとのぼっていく。やはり目に付くのはクモである。ヤマシロオニグモ、サツマノミダマシ、コゲチャオニグモなどが真っ先にみつきり、そこで少し網を張るクモたちについて話す。一度教わると子ども達はつぎつぎに「ここにもおるで」「きゃ～これ何」などと大騒ぎになってくるから面白い。

この観察路ではトゲグモやアカイロトリノフンダマシなどの特徴的なクモが出てきた。トゲグモは「なんかカッコええ～」アカイロは「きゃあ～かわいらしい」というのが子ども達の率直な評価だった。

夜間観察ではどうしても網を張るクモが主体になるが、葉っぱにアリグモやハナグモやワカバグモがいるのを見つける子どももおり、「クモには網を張らないのもいるけど、やっぱりみんな糸をつかうんだよ」と話す。夜間観察では「懐中電灯」という道具を手にする事で「探す」という意識が普段以上に高まるようだ。ゲジやカマドウマ、大形のナメクジなど夜ならではの生き物が続々発見される。

「こんどは電灯を消してください」「いまからしばらく全員黙ってみましょう」と言って真っ暗な山道で全員静まりかえる。すると道ばたにほのかに光るマドボタルの幼虫を見つける者が現れ、驚きとともにおおいに盛り上がる。

ところでナイトハイキングでは必ず長靴、長袖、長ズボンの着用させている。マムシ対策はもちろん、場所によってはとんでもない生き物の攻撃を受けることがあるからだ。8月に大屋町の明延自然学校周辺でナイトハイキングをしたときのこと。なんとヤマビルがびよんびよん長靴を這いのぼり、ズボンに付着して繊維の隙間から侵入しようとしている。

生まれて初めての経験で驚いたが、但馬地方の南部ではここ5～6年の間に爆発的にヤマビルが増加しているもようだ。

この日のナイトハイキングは雨が降ってしまひひとつの収穫だったが、クモの網に水滴がついて暗闇に浮かび上がり、なるほど霧吹きを使えばクモの網の観察が効果的にできるなというヒントをもらった。

これらの観察会ではもういちど朝（昼）にも同じコースを歩いてみた。すると夜に見られたクモたちが網をたたくで枝の上で休んでいるのを見つけ、夜と昼の活動の変化に気付いている子ども達も多かったようだ。

6月のホテル観察会、9月の秋の鳴く虫観察会などの ナイトハイキングには100人以上の参加があり、解説のフリップなども充実させてきたが、そういえば「クモ用紙芝居」はまだだ。

つぎの夏には、霧吹きと紙芝居を用意してのぞむことにしよう。

本庄さんのクモのホームページができました。 <http://brookspider.hoops.ne.jp/>

関西クモ研究会 2001年度例会の記録

2001年12月23日（日）に四天王寺高等学校（大阪市天王寺区）で2001年度の例会が開催された。

役員会

例会に先だって、役員会が開かれた。

出席者：山野忠清（会長）、吉田真（編集）、船曳和代（編集）、榎元智子（編集）、加村隆英（庶務）、牧野達也（会計）、西川喜朗（顧問）、田中穂積（会計監査）

(1) 2002年度の行事予定

採集会：

2002年6月2日（日）京都府八幡市

2002年9月22日（日）京都府八幡市？

例会：

2002年12月22日（日）場所は、園田学園女子大学または四天王寺高等学校

(2) 「くものいと」の編集

第31号を2002年1月に発行予定。

(3) 会計

2000年度（2001年3月末日）までの会計報告を「くものいと」第32号に掲載予定。2001年度からは会計監査が機能するので、以後は、会計報告を監査報告とともに「くものいと」に掲載することとする。会費未納者については、督促状を発送の予定（「くものいと」発送時に同封）。

会費値上げの件：「くものいと」の内容充実に伴い、年会費1,000円では会計が赤字となることが明らかであるので、値上げを検討する。具体的には、今後、役員で検討のうえ、次年度の例会の折に提案する。

(4) その他

「くものいと」のバックナンバーの価格については、第27号以降は、1冊500円と

する。

例会

出席者：赤松史憲，飯島ひろこ，池田和穂，池田勇介，石井幸子，加村隆英，坂口佳史，座古禎三，清水裕行，須賀瑛文，田中穂積，谷川明男，西川喜朗，福本伸男，船曳和代，牧野達也，榎元智子，山野忠清，吉田哉，吉田真（計 20 名）。

講演発表

- (1) 吉田哉：ヒメグモ科の分類（特にミジングモ亜科について）
- (2) 谷川明男：エクアドルのクモ類観察紀行
- (3) 船曳和代：エクアドル紀行（現地で採集した網の標本）
- (4) 清水裕行：兵庫県のセアカゴケグモ，2001 年の状況

その他に，西川喜朗さん作成による，「クモ関係，簡体字早見表（日本の漢字と中国の漢字の対応表）」が配付された。

近況報告

例会の折に書いていただいたものを紹介します。

赤松史憲

地元である大和高田市内の神社でクモを採集して，やっと市内全神社の調査を完了しました（とは言っても，大和高田市は奈良県内で一番小さい市ですが）。

池田勇介

小学 1 年生になりました。山の近くに引越しましたので，今年の夏はまた違ったクモが採れています。ペットのチリアン・フレーム・タランチュラも 2 回目の冬を迎えます。

石井幸子

時々，電話でお話していた船曳さんにお会いできうれしかったこと。ウェブアートの作り方のコーチをしていただき，これはやってみたいと思いました。

坂口佳史

今年（2001 年）は奈良で採集会があったのでガイドをしましたが，ふだんはクモ研究はしていません。12 月にあるこの会合が参加の場です。一番興味があるのは，外国へ採集旅行に行った報告で，クモ以外の植相や風土にも関心があります。

座古禎三

今年も大阪市立博物館の同定会に，クモ担当として行きました。クモの標本が少なく，暇でした。去年は，会員の清水さんが来て下さり，少しはさまになりました。来年は誰か，会員の方が来て下さればうれしいです。

清水裕行

2001 年はあまり調査採集はしていません。そのかわり，「学際的」交流と若手の発掘(?)に努めました。前者は魚類学者との接触で，淡水魚を捕食するハエトリグモ類の研究に協力しました。後者は神戸市の小学生との通信です。夏休みの作品展で，クモの研究発表をした 2 人に手紙を書いたところ，返事をくれました。来年もクモをテーマにした発表をしてくれることを期待しています。詳しくは，改めて「くものいと」に報告します。

谷川明男

昨年は参加することができませんでしたので、2年ぶりの参加です。いよいよコガネグモ科の総まとめにとりかかり始めました。サカグチトリノフンダマシやワクドツキジグモなど、雄が不明というものが多くて困っています。雄がいなければ繁殖できないのですから、どこかにいるはずなんですが……。

福本伸男

視力が衰え、一昨年に関西クモ研究会を最後に、クモにはおさらばするつもりでしたが、最近、白内障の手術をして、少し見えるようになったので、クモにもちょっとあいさつするつもりで、この研究会に再参加しました。日進月歩のクモ研究について行くことはできないけれど、研究会の雰囲気はやはりいいですね。今回は、谷川さんの鮮明で楽しいスライドによるエクアドル報告が印象的でした。

船曳和代

2年間にわたって採集してきた宍粟郡安富町関のクモをまとめています。「くものいと」31号に発表する予定です。

吉田哉

日本産のヒメグモ科の全体のまとめをほぼ終わり、近々発表の予定です。大阪は縁のある地ですが、遠方ですのでなかなか来ることができません。

西川喜朗

ヒメグモ科のミジグモ類は、かなり特別なグループらしい(吉田哉氏)、興味深かったです。エクアドルの角のあるクモ類のすばらしい写真(谷川明男氏)、感激でした。エクアドルの人や自然も、次回には紹介してほしい。セアカゴケグモは兵庫県南部でも定着しつつある(清水裕行氏)、都市や新興住宅地のクモは、今後とも注意したい。

時間がいっぱいありそうで、あまり時間がとれず、福本さん、須賀さん、石井さん、飯島さん達や、池田勇介くんの話が聞けなくて残念でした。

吉田真

夏にエクアドルに行き、この国がすっかり気に入ってしまいました。早く立命をやめて、アマゾンに永住したいものだと思っています(たぶん、思っているだけだけど……)。

无关系 简体字早见表 (2001.12.5.西川, 12.14改)

勤 類 報
动物分类学 学报

广 → 宀, 庵 盖 → 蓋
药 → 藥

义 → 義

徐亞君 → 亞

农田 → 農田

际 → 際

陈章福 → 陳

鉴别 → 鑑別

业 → 業

尹长民 → 長

记录 → 記錄

术 → 術

赵敬釗 → 趙, 釗

发育 → 發育

纟 → 糸

胡运瑾 → 運

形态 → 形態

织 → 織

朱传典 → 傳, 伝

构造 → 構造

积 → 積

朱泽瑞 → 澤, 沢

天敌 → 天敵

识 → 識

江苏省 → 江蘇省

环境 → 環境

异 → 異

师范 → 師範

适应 → 適應

节 → 節

种 → 種

论 → 論

保护 → 保護

阴 → 陰

见 → 見

检 → 檢

郑 → 鄭

阳 → 陽

两 → 兩

记 → 記

杨 → 楊

龙 → 龍

关 → 關

观 → 觀察

标 → 標本

马 → 馬

杂志 → 雜誌

纺 → 紡

电 → 電

鸟 → 鳥

网 → 網

钢 → 鋼

扫 → 掃

兰 → 蘭

华 → 華

书 → 書

产 → 產

丰 → 豐

钱 → 錢

头 → 頭

习 → 習

吴 → 吳

叶 → 葉

灵 → 靈

飞 → 飛

陆 → 陸

拟 → 擬

无 → 無

园 → 園

从 → 從

达 → 達, 边 → 邊, 进 → 進, 这 → 這,

圆 → 圓

祸 → 禍(?)

图 → 圖,

几 → 幾

风 → 風

キノボリトタテグモの採集記録

西川喜朗

キノボリトタテグモ *Ummidia fragaria* (Donitz, 1887)の貴重な標本を、多くの友人たちからいただいた。ここにその採集データを記録して、標本を提供していただいた方々に心からお礼を申し上げます。そして、クモの分布資料として参考になれば幸いです。

体長が約 10mm 以上のよく成熟していそうなメスは♀a とし、約 7～9 mm のメスは♀とし、7 mm 以下のものはy と記した。

- 三重県員弁郡北勢町塩崎～阿下喜, 5-V-1973, 1 y (桂孝次郎・富永修採集)
 京都府京都市右京区, ポンポン山WNW, 350m alt 20-V-1979, 1 ♀ (桂孝次郎採集)
 大阪府高槻市出灰, ポンポン山NW, 400m alt 24-IV-1988, 1 ♂a (歩行中) (桂孝次郎採集)
 大阪府茨木市泉原, 350m alt. 25-II-1973, 1 ♀a (毎川幸範採集)
 大阪府四条畷市南野, 四条畷神社, 25-XII-1974, 1 y (座古禎三採集)
 奈良県吉野郡川上村白屋, 丹生川上神社, 21-XII-1972, 3 ♀a, 1 ♀, 1 ♂a, 7 y (ほかに子グモが多数いた) (桂孝次郎・毎川幸範採集)
 奈良県御所市森尾, 一言主神社, 25-XI-1973, 1 ♀a (奥田洋子採集)
 兵庫県神戸市兵庫区, 丹生山, 15-IX-1973, 1 ♀ (道盛正樹採集)
 兵庫県姫路市飾東町八重畑, 春日神社, 50m alt. 10-IV-1973, 1 ♀ (桂孝次郎採集)
 兵庫県飾磨郡家島町宮, 万体地藏苑, 23-XI-1973, 1 ♀ (水谷博治採集)
 兵庫県飾磨郡家島町宮, 23-XI-1973, 1 ♀a, 1 ♀ (桂孝次郎採集)
 兵庫県養父郡養父町大藪, 光明山W, 110m alt. 11-IV-1973, 1 ♀a, 1y (桂孝次郎採集)
 兵庫県龍野市新宮, 60m alt. 10-IV-1973, 1 ♀ (桂孝次郎採集)
 岡山県高梁市臥牛山, 200-300m alt. 21-III-1975, 1 ♀a (巣の中に子グモがいた) (桂孝次郎採集)
 愛媛県南宇和郡御荘町菊川, 20m alt. 8-II-1975, 1 ♂a (平化 満採集)
 高知県安芸郡北川村魚梁瀬, 29-III-1973, 1 y (児玉 務採集)
 熊本県熊本市河内町大将陣, 340m alt. 2-I-1978, 1 ♀a (土中) (春沢圭太郎採集)

京都(数ヶ所)のクモ

田中穂積

兵庫県産の採集記録を先の号で発表しました。今回は、京都産について報告したいと思ひます。大学時代の採集の同定結果なので、ずいぶん誤っているかと思ひます。ご指摘していただき、訂正していきたくて思ひます。よろしくお願ひします。

1. 北桑田郡京北町芹生 (1965年5月15日)

ヒメグモ科 (7)	アシナガグモ科 (1)	エビグモ科 (2)
コガネヒメグモ	ヤサガタアシナガグモ	アサヒエビグモ
ツリガネヒメグモ	タナグモ科 (2)	シャコグモ
バラギヒメグモ	ホラズミヤチグモ	ハエトリグモ科 (4)
ヒメグモ	ヤマタナグモ	ウススジハエトリ
ヒザブトヒメグモ	ハタケグモ科 (1)	オオハエトリ
ホシミドリヒメグモ	ハタケグモ	ジャバラハエトリ
ヤリグモ	キシダグモ科 (1)	ヤマジハエトリ
サラグモ科 (5)	アズマキシダグモ	
シロブチサラグモ	イオウイロハシリグモ	
ズキンヌカグモ	スジアカハシリグモ	
ハンモックサラグモ	コモリグモ科 (2)	
ユノハマサラグモ	ウツキコモリグモ	
ヨツボシサラグモ	クラークコモリグモ	
コガネグモ科 (10)	フクログモ科 (1)	
アオオニグモ	ウラシマグモ	
カラフトオニグモ	アシダカグモ科 (1)	
コオニグモモドキ	コアシダカグモ	
サガオニグモ	ワシグモ科 (1)	
タニマノドヨウグモ	チャクロワシグモ	
マメオニグモ	カニグモ科 (5)	
ムツボシオニグモ	アマギエビスグモ	
メガネドヨウグモ	トラフカニグモ	
ヤミイロオニグモ	ハナグモ	
ヨツデゴミグモ	フノジグモ	
	ワカバグモ	

2. 北桑田郡美山町灰野 (1969年6月7-8日) (京大演習林)

ウズグモ科 (2)	アシナガグモ科 (1)	ハエトリグモ科 (7)
ウズグモ	ウロコアシナガグモ	ウススジハエトリ
マネキグモ	タナグモ科 (1)	カラスハエトリ

ヒメグモ科 (3)
キベリミジグモ
ギボシヒメグモ
バラギヒメグモ

サラグモ科 (6)
ズキンヌカグモ
チビアカサラグモ
デーニッツサラグモ
ハンモックサラグモ
ムナグロサラグモ
ヨツボシサラグモ

センショウグモ科 (1)
センショウグモ

カラカラグモ科 (1)
ヤマジグモ

コガネグモ科 (8)
ギンナガゴミグモ
コオニグモモドキ
サガオニグモ
マメオニグモ
マルズメオニグモ
メガネドヨウグモ
ヤマトカナエグモ
ヨツデゴミグモ

ホラズミヤチグモ
キシダグモ科 (2)
アズマキシダグモ
スジアカハシリグモ

フクログモ科 (1)
トビイロフクログモ

アシダカグモ科 (1)
コアシダカグモ

カニグモ科 (7)
アマギエビスグモ
ガザミグモ

コハナグモ
トラフカニグモ

フノジグモ
ヤミイロカニグモ

ワカバグモ
エビグモ科 (1)
シャコグモ

チャイロアサヒハエトリ
デーニッツハエトリ
ネコハエトリ
マガネアサヒハエトリ
マミジロハエトリ

3. 北桑田郡美山町芦生 (1969年6月9日) (京大演習林)

ウズグモ科 (1)
ウズグモ

ヒメグモ科 (4)
バラギヒメグモ
ヒザブトヒメグモ
ヒメグモ
ヤリグモ

サラグモ科 (3)
チビアカサラグモ
ヨツボシサラグモ
ズキンヌカグモ

カラカラグモ科 (1)
ヤマジグモ

コガネグモ科 (7)
カラフトオニグモ

キザハシオニグモ
ギンナガゴミグモ
ゴミグモ

タニマノドヨウグモ
ホシミドリオニグモ
ヨツデゴミグモ

アシナガグモ科 (1)
ウロコアシナガグモ

コモリグモ科 (2)
ウズキコモリグモ

ナミコモリグモ
フクログモ科 (1)

コフクログモ
エビグモ科 (1)

シャコグモ
カニグモ科 (1)

ワカバグモ
ハエトリグモ科 (2)

デーニッツハエトリ
マミジロハエトリ

4. 京都市広河原 (1969年6月10日)

ウズグモ科 (1)	コガネグモ科 (2)	キシダグモ科 (1)
ウズグモ	ムツボシオニグモ	アオグロハシリグモ
ヒメグモ科 (1)	ヨツデゴミグモ	フクログモ科 (2)
オナガグモ	アシナガグモ科 (2)	ハマキフクログモ
サラグモ科 (2)	ウロコアシナガグモ	ムナアカフクログモ
ハンモックサラグモ	ヤサガタアシナガグモ	イズツグモ科 (1)
ヨツボシサラグモ		ナガイズツグモ

5. 京都市広河原 (1969年8月29日)

ウズグモ科 (1)	コガネグモ科 (6)	アシナガグモ科 (1)
ウズグモ	カラスゴミグモ	キララシロカネグモ
ヒメグモ科 (3)	ギンナガゴミグモ	タナグモ科 (1)
ギボシヒメグモ	ジョロウグモ	ホラズミヤチグモ
ホシミドリヒメグモ	タニマノドヨウグモ	アシダカグモ科 (1)
ヤリグモ	ヨツデゴミグモ	コアシダカグモ
カラカラグモ科 (1)	ワキグロサツマノミダマシ	ハエトリグモ科 (1)
ヤマジグモ		カラスハエトリ

6. 京都市左京区貴船 (1969年9月20日)

ウズグモ科 (3)	コガネグモ科 (6)	タナグモ科 (2)
ウズグモ	コガタコガネグモ	クサグモ
オウギグモ	ゴマジロオニグモ	ホラズミヤチグモ
マネキグモ	トガリオニグモ	コモリグモ科 (1)
ヒメグモ科 (2)	ヤマゴミグモ	ハリゲコモリグモ
コガネヒメグモ	ヤマジドヨウグモ	ハエトリグモ科 (3)
ヤリグモ	ヨツデゴミグモ	デーニッツハエトリ
サラグモ科 (1)		ネコハエトリ
ヤマジサラグモ		ムツバハエトリグモ

7. 京都市左京区貴船 (1970年5月10日)

コガネグモ科 (5)	ハタケグモ科 (1)	ハエトリグモ科 (1)
サガオニグモ	ハタケグモ	マミジロハエトリ
シロスジシヨジョウグモ	キシダグモ科 (1)	
ナガテオニグモ	アズマキシダグモ	
ハナオニグモ	コモリグモ科 (4)	
ヨツデゴミグモ	ウヅキコモリグモ	
タナグモ科 (2)	ナミコモリグモ	
ホラズミヤチグモ	ハリゲコモリグモ	
ヤチグモ	ヤマハリゲコモリグモ	

8. 京都市左京区大悲山ふもと (1970年9月12日)

サラグモ科 (1)

ユノハマサラグモ

コガネグモ科 (1)

ヤマジドヨウグモ

タナグモ科 (2)

ホラズミヤチグモ

ヤチグモ

キシダグモ科 (1)

アオグロハシリグモ

コモリグモ科 (4)

キバラコモリグモ

ナミコモリグモ

ハリゲコモリグモ

ヤマトコモリグモ

“兵庫県 (数ヶ所) の採集記録” の一部訂正

田中穂積

前回, “兵庫県 (数ヶ所) の採集記録” を報告したが, その後, 一部修正個所が出て来たので, 訂正をお願いします。

1. P.27 ; シャコグモ科をエビグモ科に。
2. P.28 ; ワカバグモをヤミイロカニグモの後に。
3. P.29 ; スズミグモをジョロウグモに。
4. P.29 ; 7. 氷上郡丹南町龍蔵寺を多紀群篠山市龍蔵寺に。
5. P.30 ; 8. 多紀群篠山町兵庫農大を多紀群篠山市東浜谷 (兵庫農大) に。
6. P.31 ; ハナオニグモをムツボシオニグモに。
7. P.32 ; カニヒメグモをカニミジグモに。
8. P.32 ; トガリオニグモ (上から2つ目) を削除。

以上

京都府のクモの採集記録

西川喜朗

お墓参りや病院通いなどで京都方面へ出かけたついでに、チョコチョコッと採集してきたり、物見遊山に出かけた時に採集したクモで、同定できたものを報告いたします。

和名と種の配列は「クモの学名と和名」(八木沼・平嶋・大熊, 1989) によった。

1) 京都市右京区梅ヶ畑奥殿, 190m alt. (針葉樹の植林)

15-IV-1999, Leg. 西川喜朗 (シフティング)

コムラウラシマグモ 1♂

クロチャケムリグモ 1♂

2) 京都市右京区梅ヶ畑畑町, 120m alt. (高尾病院のうら)

15-IV-1999, Leg. 西川喜朗 (シフティング)

スネグロオチバヒメグモ 1♀y

デーニツツサラグモ 1♀

アリマネグモ 2♀, 1♂

ナンブコツブグモ 1♀y, 1♂y

ウラシマグモ s p. 2♀y

3) 京都府北桑田郡美山町中, 280m alt. (白峰寮のうら)

9-VIII-2000, Leg. 西川喜朗 (スィーピング)

マネキグモ 1y

オナガグモ 1y

カラスゴミグモ 1y

ワキグロサツマノミダマシ 1♀, 1♂

オオシロカネグモ 2♀

キンヨウグモ 1y

ジョロウグモ 1♂y

ワカバグモ 1y

ウススジハエトリ 1♂y

4) 京都府長岡京市奥海印寺, 100m alt.

5-XI-2000, Leg. 西川喜朗 (シフティング)

ヒメヤマヤチグモ 1♀

カミガタヤチグモ 1♀

コムラウラシマグモ 1♀

関西クモ研究会奈良市内採集会 (2001. 6. 10) 報告

赤松 史憲

遅くなりましたが、去る6月10日、奈良市内：高畑町(標高 120-130 m alt.)・白毫寺町(標高 130-220m alt.)で行った採集会の結果を報告します。この日は天気も晴れ、この季節にしては暑かったですが、絶好の採集日和でした。今回採集会に参加して下さったのは、<池田幸二，池田和穂，池田勇介，池田亮太，大崎茂芳，加村隆英，坂口佳史，東條 清，西川喜朗，船曳和代，榎元智子，吉田真，赤松史憲>でした。

以下のリストは、私の方に寄せられた今回の採集会で採集された報告を元とめ、[学名-和名-採集者-採集個体-採集地]の順で作成しました。採集者名は上一文字[東條清(東)，船曳和代(船)，加村隆英(加)，西川喜朗(西)，池田幸二・和穂・勇介・亮太(池)，坂口佳史(坂)，榎本智子(榎)，赤松史憲(赤)…順不同]で、採集個体は[成体…♂・♀，亜成体…(亜)，幼体…性別+(幼)，目撃…(目)，個体数…数字・多数，採集地…高畑町[高]・白毫寺町[白]]で示しました。また、学名は日本産クモ類目録(谷川明男氏)を元にさせていただきました。

<23科86種>

Desidae ウシオグモ科

Badumna insignis (L. Koch 1872) クガケジグモ 加(目) [白]

Titanoecidae ヤマトガケジグモ科

Nurscia albofasciata Strand 1907 ヤマトガケジグモ 東♀ 榎♂ 加♂ [高]

Onopidae タマゴグモ科

Opopaea sharakui (Komatsu 1967) シャラクダニグモ 加♀ [白]

Pholcidae ユウレイグモ科

Pholcus crypticolens Bosenberg & Strand 1906 ムレグモ 榎♀ 赤♀ [白]

Uloboridae ウズグモ科

Octonoba sybotides (Bosenberg & Strand 1906) カタハリウスグモ 池♀ [高]

Octonoba varians (Bosenberg & Strand 1906) ウズグモ 西♀ [白] 東♀

Octonoba sp. 榎(幼)

Theridiidae ヒメグモ科

Achaearanea tepidariorum (C. Koch 1841) オビグモ

東♀5 榎(幼) 赤♂ [高] (幼)♂ [白] 西♀(幼)♂(幼) [白]

Achaearanea japonica (Bosenberg & Strand 1906) ヒメグモ 船(幼) [白]

Theridion adamsoni Berland 1934 サトヒメグモ 船♀ [白]

Anelosimus crassipes (Bosenberg & Strand 1906) アシブトヒメグモ 船♀ [白]

Argyrodes kumadai Chida & Tanikawa 1999 刊イソウグモ

- Acusilas coccineus* Simon 1895 ハツクモ 赤♀ [白] 榊♀ [白]
Hypsosinga pygmaea (Sundevall 1831) ヨツボシヨウジヨウクモ 西♀ [白]
Araneus uyemurai Yaginuma 1960 ヤマホシクモ 池 (幼) [白]
Cyclosa monticola Bosenberg & Strand 1906 ヤマゴミクモ 榊♀ [白]

Tetragnathidae アシナガクモ科

- Nephila clavata* L. Koch 1878 シヨウクモ
 加 (目) [高] 西 (目) [高] [白] 東 (幼) 多数
Tetragnatha praedonia L. Koch 1878 アシナガクモ
 船♀ (幼) [白] 坂♀ [白] 東♀ 10 赤♀ (幼) [高]
Tetragnatha maxillosa Thorell 1895 ヤサカタアシナガクモ
 西♀ [高] 2 [白] ♂ [白] 榊♂ 3 [高]
Leucauge subgemmea Bosenberg & Strand 1906 キラシロカネクモ 船♀
 [白]
Leucauge magnifica Yaginuma 1954 材シロカネクモ
 西♀ 2 ♀ (幼) 5 ♂ 5 [白] 坂♀ [白] 東♀ 5
Meta reticuloides Yaginuma 1958 ヤマジトヨクモ 池♀ 5
Leucauge sp. 榊♂ (幼)

Oecobiidae チリグモ科

- Uroctea compactilis* L. Koch 1878 ヒラクモ 東♀

Agelenidae タナグモ科

- Agelena limbata* Thorell 1879 クサクモ 西 (目) [白] 加 (目) [高]

Liocranidae ウエムラグモ科

- Itatsina praticola* (Bosenberg & Strand 1906) 夕クモ
 加 (幼) [白] 西♂ (幼) [白] 池 (幼) [高]
Orthobula crucifera Bosenberg & Strand 1906 オビクモ 加♀ [白] 西♀ [白]
Phrurolithus coreanus Paik 1991 キレヒウラシマクモ 加♂ [白]

Clubionidae フクログモ科

- Clubiona lena* Bosenberg & Strand 1906 ヒイロクモ 加♀ [白]
Clubionidae sp. フクモの一種 榊 (幼) [白]

Ctenidae シボグモ科

- Anahita fauna* Karsch 1879 シボクモ 西♀ (幼) [白]

Gnaphosidae ワシグモ科

- Callilepis schuschteri* (Herman 1879) フタホシオクモ 加♂ [白]

Oxyopidae ササグモ科

- Oxyopes sertatus* L. Koch 1878 ササクモ 西♀♂♂ (幼) [白] 榊♂ 2 [白]

Lycosidae コモリグモ科

- Pardosa laura* Karsch 1879 ハリケコモリクモ 船♀ [白] 西♀♂ [白]
Pardosa astrigera L. Koch 1878 ウツキコモリクモ 東♀ 多数
Pardosa brevivulva Tanaka 1975 ヤマハリケコモリクモ 東♀ 多数 西♀ [白]
Pirata clercki (Bosenberg & Strand 1906) クレーコモリクモ 榊♂

Pardosa laura sp. ハリゲコモリグモの一種 加♀4 [白]

Pardosa sp. 梴♀2 [白]

Philodromidae エビグモ科

Tibellus tenellus (L. Koch 1876) シヤコグモ 梴(幼)

Philodromus auricomus L. Koch 1878 キンロビグモ 梴♂

Philodromidae sp. エビグモの一種 池(幼)

Thomisidae カニグモ科

Oxytate striatipes L. Koch 1878 ワカバグモ 船♀ [白]

Misumenops tricuspidatus (Fabricius 1775) ハナグモ 船♀ [白]

Diaea subdola O. P.-Cambridge 1885 コハナグモ 船♀2 [白]

Xysticus croceus Fox 1937 ヤミイロカニグモ 船♀ [白] 東♀

Bassaniana decorata (Karsch 1879) キハナカニグモ 梴♂

Xysticus ephippiatus Simon 1880 カラカニグモ 赤♂ [白]

Ozyptila nipponica Ono 1985 ニッポンオチバカニグモ 西♀♂(幼) [白]

Salticidae ハエトリグモ科

Evarcha albaria (L. Koch 1878) マジロハエトリ 東♂ 梴♀ 西♀ [白]

Myrmarachne japonica (Karsch 1879) アリグモ 東♀ 赤♀(幼) [白]

Siler cupreus Simon 1888 アオヒハエトリ

東♀ 加(目) [高] 池♂(幼) [高] 赤♀ [白]

Menemerus fulvus (L. Koch 1878) シラヒゲハエトリ 梴♀♀(幼)

Phintella versicolor (C. Koch 1846) マスジロハエトリ 船♀ [白]

Plexippus paykulli (Audouin 1827) チャスジハエトリ 船♂ [白]

Harmochirus insulanus (Kishida 1914) ウデブトハエトリ 加♂ [白] 西♂(幼) [白]

Harmochirus sp. ウデブトハエトリの一種 池(幼) [高]

Aelurillus festivus (L. Koch 1834) ヤマジハエトリ 加♀ [白]

Salticidae sp. ハエトリグモの一種 梴♂

奈良市採集会で採れたクモ (2001. 9. 9)

清水裕行

第3回奈良市採集会は2001年9月9日に行われた。いつものように近鉄奈良駅に集合した後、バスに乗り、「高畑住宅」(高畑町)で下車した。白毫寺橋で能登川を渡って、白毫寺町に入った。さらに、高円高校付近を經由して鹿野園町に入って、八坂神社で昼食。その後、東海自然歩道から県道80号線(奈良名張線)を經由して、白毫寺町に戻り解散した。高円高校付近の畦道と東海自然歩道以外、コースのほとんどが舗装道路で、自然環境に乏しく、第1回の柳生街道に比べるとクモ相は若干貧弱に思える。

参加者は、船曳和代、池田勇介、池田幸二、池田和穂、池田亮太、梶元ともこ、西川喜朗、坂口佳史、吉田真、清水裕行の計10名(敬称略)であった。採集情報は坂口佳史・船曳和代・西川喜朗・池田勇介(幸二氏代筆)の各氏から寄せられた。これをもとに今回の採集記録を作成した。

[採集日] 2001年9月9日(日曜日)

[採集場所]

- 1 奈良県奈良市。標高110~130m。東経135度50分, 34度40分。
- 2 同。標高130~140m。東経135度50分, 北緯34度39分。
- 3 同。標高130~210m。東経135度51分, 北緯34度39分。

(注) 標高は西川氏に御教授いただいた。

[採集記録]

<18科38種>

	Amaurobiidae	ガケジグモ科	
<i>Ixeuticus robustus</i>	クロガケジグモ	鹿野園町	1♀ (坂口)
	Dictynidae	ハグモ科	
<i>Dictyna felis</i>	ネコハグモ	高畑町, 3♀, 6♂y (西川); 鹿野園, 2♂, 2♀y, ♂y (西川)	
	Uloboridae	ウズグモ科	
<i>Octonoba varians</i>	ウズグモ	鹿野園町 (池田)	
	Oecobiidae	チリグモ科	
<i>Oecobius annulipes</i>	チリグモ	鹿野園町, 1y (西川)	
	Leptonetidae	マシラグモ科	
<i>Leptoneta striata</i>	ヨコフマシラグモ	鹿野園町, 1♀ (西川)	
	Theridiidae	ヒメグモ科	
<i>Achaearanea culicivora</i>	カグヤヒメグモ	1♀ (船曳)	
<i>A. japonica</i>	ヒメグモ	1♀ (船曳); 鹿野園町, 3♀ (西川)	
<i>A. tepidariorum</i>	オオヒメグモ	1♀ (船曳); 鹿野園町, 1♀ (西川)	
<i>Argyrodes bonadea</i>	シロカネイソウロウグモ	鹿野園町, 1♀ (西川)	

- A. cylindratus* トビジロイソウロウグモ 鹿野園町, 1♀ (西川)
A. cylindrogaster オナガグモ 鹿野園町, 1♀ (坂口); (池田)。
A. kumadai チリイソウロウグモ 鹿野園町 (池田)
Episinus nubilus ムラクモヒシガタグモ 鹿野園町, 1y (西川)
Linyphiidae サラグモ科
Linyphia longipedella アシナガサラグモ 鹿野園町, 1♀ (西川)
Anapidae ヨリメグモ科
Comaroma maculosum ヨロイヒメグモ 鹿野園町, 2♀, 1♂ (西川)
Araneidae コガネグモ科
Acusilas coccineus ハツリグモ 鹿野園町, 1y (西川)
Araneus cornutus ナカムラオニグモ 1♀ (船曳); 白毫寺町, 2y (西川);
鹿野園町, ♀ (池田)
Araneus mitificus ビジョオニグモ 1♀ (船曳);
Argiope minuta コガタコガネグモ 1♀ (船曳); 鹿野園町, 2♀ (西川)
Cyclosa argenteoalba ギンメッキゴミグモ 鹿野園町, 2♀ (西川)
C. ginnaga ギンナガゴミグモ 鹿野園町 (池田)
C. octotuberculata ゴミグモ 鹿野園町, 1y (西川)
C. omonaga シマゴミグモ 2♀ (船曳)
Neoscona adianta ドヨウオニグモ 鹿野園町, ♀ (池田)
Tetragnathidae アシナガグモ科
Leucauge subblanda コシロカネグモ 鹿野園町, 1♀ (西川)
Nephila clavata ジョロウグモ 鹿野園町, 1♀ (坂口); 1♂ (西川)
Tetragnatha maxillosa ヤサガタアシナガグモ 1♀ (船曳); 白毫寺町,
2♂ (西川)
T. praedonia アシナガグモ 白毫寺町, 3♀, 2♂ (西川); 鹿野園町,
1♀ (坂口)
Urocteidae ヒラタグモ科
Uroctea compactilis ヒラタグモ 鹿野園町, 1y (西川)
Agelenidae タナグモ科
Agelena opulenta コクサグモ 鹿野園町, 1♂y (西川)
Pisauridae ハシリグモ科
Dolomedes sulfurous イオウイロハシリグモ 白毫寺町, 1y (西川)
Oxyopidae ササグモ科
Oxyopes sertatus ササグモ 鹿野園町, ♀ (池田)
Clubionidae フクログモ科
Itatsina praticola イタチグモ 鹿野園町, 2y (西川)
Phrurolithus komurai コムラウラシマグモ 鹿野園町, 1♀y (西川)
Heteropodidae アシダカグモ科
Heteropoda forcipata コアシダカグモ 鹿野園町, 1y (西川)
Thomisidae カニグモ科

Tmarus rimosus

セマルトラフカニグモ 1♀ (船曳)

Salticidae ハエトリグモ科

Mendoza elongata

ヤハズハエトリ 1y (船曳)

Plexippus setipes

ミスジハエトリ 鹿野園町, 1♀ (西川)

以上, 各自の同定による。

(お願い)

今回は情報提供が間に合わなかった方は改めて報告していただくことを希望します。各自で発表していただいても結構ですし、私にお知らせいただければ追加報告します。また、今回は省略した個体数や雌雄、詳しい地名がわかる場合にもお知らせいただければ幸いです。「個体数」は時々誤解される方がありますが、「生息数」ではなく、実際に採集した数です。これは生息数を正確に反映しているわけではありませんが、その場所での大体の傾向を知るてがかりになります。雌雄や成長段階がともに記されていると、生活史を他の地方と比較することがある程度可能になります。より質の高い記録を後世に残すために、どうかアフターケアをお願いします。なお、詳しい町名を記録していなかった場合にはその旨明記していただければ結構です。

かく言う私も同定が間に合わず、今回報告を出しませんでした。申し訳ありません。第1回と第2回(注)の記録と合わせて、できるだけ早く報告いたしますので、どうか御容赦ください。

(注) 私は第2回目は遅刻して、ついに皆さんに合流できませんでした。コースが変更になったと知らなかったので、第1回目と同じ柳生街道で独自に採集していました。



兵庫県宍粟郡安富町関のクモ

船曳和代

安富町関で約2年間にわたり採集したクモをひとまずまとめ、発表することになりました。安富町関は「くものいと」27号の「フィールド紹介」で紹介させていただきましたが、私はここへ約5年間足繁く通いました。その第一の目的は網をとることでした。そのため最初の3年間ほどはまったく採集しませんでした。しかしそのうち色々なクモにであうにつれこの地にどのようなクモがいるのか書き残しておく必要があるのではないかと思うようになりました。そして今回、目撃記憶のハッキリしている2種と卵のうを採集したことのある1種を加え、116種のクモを発表します。なお、このリストをまとめるにあたり一部標本の同定を吉田真様、田中穂積様をお願いしました。また、谷川明男様には標本の同定と和名から学名への変換、配属、配列でお世話になりました。各氏に厚くお礼申し上げます。

Pholcidae ユウレイグモ科

Pholcus crypticolens Bos. & Str. 1906 ユウレイグモ 2000. 9. 2 ♀

Mimetidae センショウグモ科

Ero japonica Bos. & Str. 1906 センショウグモ 2000. 5. 13 ♂y

Mimetus testaceus Yaginuma 1960 オオセンショウグモ 2001. 6. 9 ♀

Oecobiidae チリグモ科

Uroctea compactilis L. Koch 1878 ヒラタグモ 2000. 8. 12 y

Uloboridae ウズグモ科

Hyptiotes affinis Bos. & Str. 1906 オウギグモ 2000. 8. 12 ♂y

Miagrammopes orientalis Bos. & Str. 1906 マネキグモ 2001. 6. 9 ♂

Octonoba sybotides (Bos. & Str. 1906) カタハリウズグモ

2000. 9. 2 ♀, 2001. 6. 9 ♀

Octonoba varians (Bos. & Str. 1906) ウズグモ 2000. 5. 13 ♀

Theridiidae ヒメグモ科

Achaeearanea angulithorax (Bos. & Str. 1906) ツリガネヒメグモ 2000. 8. 12 2♀

Achaeearanea culicivola (Bos. & Str. 1906) カグヤヒメグモ 2000. 8. 12 ♀

Achaeearanea ferrumequinum (Bos. & Str. 1906) ヒザブトヒメグモ 2000. 5. 13 ♀

Achaeearanea japonica (Bos. & Str. 1906) ヒメグモ 2000. 8. 12 ♀

Achaeearanea kompirensis (Bos. & Str. 1906) コンピラヒメグモ 2000. 8. 6 ♀

Achaeearanea tabulata Levi 1980 オオツリガネヒメグモ 2001. 5. 26 ♀

Achaeearanea tepidariorum (C. Koch 1841) オオヒメグモ 2000. 8. 12 ♀

Argyrodes bonadea (Karsch 1881) シロカネイソウロウグモ 2000. 10. 7 ♀

Argyrodes cylindratus Thorell 1889 トビジロイソウロウグモ 2000. 8. 8 ♀

Argyrodes fur Bos. & Str. 1906 フタオイソウロウグモ 2001. 5. 26 ♀y

- Argyrodes kumadai* Chida & Tanikawa 1999 チリイソウロウグモ 2000. 8. 12 ♀
Argyrodes melanosoma (Yaginuma 1957) クロマルイソウロウグモ 2000. 8. 8 ♀
Argyrodes saganus (Don. & Str. 1906) ヤリグモ 2000. 5. 2 y
Chryssso argyrodiformis (Yaginuma 1952) オダカグモ 2001. 7. 20 ♀
Chryssso punctifera (Yaginuma 1960) ホシミドリヒメグモ 2001. 5. 26 ♀
Chryssso rapulum (Yaginuma 1960) ギボシヒメグモ 2000. 8. 12 ♀
Chryssso venusta (Yaginuma 1957) コガネヒメグモ 2000. 8. 8 ♀
Coleosoma octomaculatum (Bos. & Str. 1906) ヤホシサヤヒメグモ 2001. 7. 14 ♀
Dipoena mustelina (Simon 1888) カニミジグモ 2001. 6. 17 ♀
Dipoena punctisparsa Yaginuma 1967 シモフリミジグモ
2001. 6. 17 ♂, 2001. 7. 7 ♀
Episinus nubilus Yaginuma 1960 ムラクモヒシガタグモ 2001. 6. 17 ♂♂
Phoroncidia altiventris Yoshida 1985 ハラダカツクネグモ 2000. 9. 12 y
Phoroncidia pilula (Karsch 1879) ツクネグモ 2000. 5. 2 ♀y
Theridion chikunii Yaginuma 1960 バラギヒメグモ 2000. 7. 8 ♀
Theridion subpallens Bos. & Str. 1906 ハイイロヒメグモ 2000. 5. 13 ♀
Theridion yunohamense Bos. & Str. 1906 ユノハマヒメグモ 1999. 8. 17 ♀

Theridiosomatidae カラカラグモ科

- Theridiosoma epeiroides* Bos. & Str. 1906 カラカラグモ 2000. 5. 13 2y
Wendilgarda sp. ナルコグモ 2000. 8. 8 ♀ 2000. 9. 12 ♂y

Anapidae ヨリメグモ科

- Conoculus lyugadinus* Komatsu 1940 ヨリメグモ 2000. 8. 8 2y

Linyphiidae サラグモ科

- Diplocephaloides saganus* (Bos. & Str. 1906) ハラジロムナキグモ 2001. 6. 9 ♀
Doenitzius peniculus Oi 1960 デーニッツサラグモ 2000. 5. 13 ♀
Hylyphantes graminicola (Sundevall 1829) クロナンキングモ 2001. 7. 7 2♀
Linyphia fusca (Oi 1960) クスミサラグモ 2000. 5. 2 2♀1♂
Linyphia oidedicata (Helsdingen 1969) ヘリジロサラグモ 2001. 6. 17 ♀
Neriere longipedella (Bos. & Str. 1906) アシナガサラグモ 2000. 8. 12 ♀
Parhypomma naraensis (Oi 1960) ナラヌカグモ 2001. 7. 7 ♀
Turinyphia yunohamensis (Bos. & Str. 1906) ユノハマサラグモ
2000. 5. 2 1♀1♂

Tetragnathidae アシナガグモ科

- Leucauge crucinota* (Bos. & Str. 1906) チビシロカネグモ 2000. 8. 12 ♀
Leucauge magnifica Yaginuma 1954 オオシロカネグモ 2000. 8. 12 ♀
Leucauge subgemmea Bos. & Str. 1906 キララシロカネグモ 2000. 9. 2 ♀
Meta reticuloides Yaginuma 1958 ヤマジドヨウグモ 2000. 5. 5 ♀
Metleucauge chikunii Tanikawa 1992 チクニドヨウグモ 2000. 9. 2 ♂
Metleucauge yunohamensis (Bos. & Str. 1906) メガネドヨウグモ
2000. 5. 2 1♀1♂

- Nephila clavata* L. Koch 1878 ジョロウグモ 2000. 8. 12 y
Tetragnatha maxillosa Thorell 1895 ヤサガタアシナガグモ 2000. 9. 2 ♂
Tetragnatha praedonia L. Koch 1878 アシナガグモ 2000. 9. 2 ♂
Tetragnatha yesoensis S. Saito 1934 エゾアシナガグモ 2001. 5. 26 1♀1♂

Araneidae コガネグモ科

- Acusilas coccineus* Simon 1895 ハツリグモ 2000. 9. 2 y
Araneus acusisetus Zhu & Song 1994 オオクマヤミイロオニグモ 2000. 5. 5 ♀
Araneus ejusmodi (Bos. & Str. 1906) ヌサオニグモ 2001. 6. 9 ♀
Araneus ishisawai Kishida 1928 イシサワオニグモ 1999. 8. 29 ♀
Araneus mitificus (Simon 1886) ビジョオニグモ 2000. 10. 1 ♀
Araneus semilunaris (Karsch 1879) マルヅメオニグモ 2001. 6. 9 ♂y
Araniella yaginumai Tanikawa 1995 ムツボシオニグモ 2000. 5. 13 ♂
Argiope amoena L. Koch 1878 コガネグモ 目撃
Argiope boesenbergi Levi 1983 チュウガタコガネグモ 2001. 6. 9 ♀y
Argiope bruennichii (Scopoli 1772) ナガコガネグモ 2000. 9. 2 ♀
Argiope minuta Karsch 1879 コガタコガネグモ 2000. 8. 12 ♀y
Cyclosa atrata Bos. & Str. 1906 カラスゴミグモ 2000. 9. 2 ♀
Cyclosa ginnaga Yaginuma 1959 ギンナガゴミグモ 2000. 7. 8 ♀
Cyclosa laticauda Bos. & Str. 1906 キジロゴミグモ 2001. 7. 7 ♀
Cyclosa octotuberculata Karsch 1879 ゴミグモ 2000. 5. 2 y
Cyclosa sedeculata Karsch 1879 ヨツデゴミグモ 2000. 5. 13 ♀
Cyrtarachne bufo (Bos. & Str. 1906) トリノフンダマシ 目撃
Cyrtarachne nagasakiensis Strand 1918 シロオビトリノフンダマシ 卵のう採集
Cyrtarachne yunoharuensis Strand 1918 アカイロトリノフンダマシ 2001. 7. 14 ♀
Eriophora sachalinensis (S. Saito 1934) カラフトオニグモ 2001. 5. 26 ♀
Eriophora sagana (Bosenberg & Strand 1906) サガオニグモ 2000. 5. 2 ♀
Eriovixia pseudocentredes (Bos. & Str. 1906) トガリオニグモ 2001. 7. 14 ♀
Hypsosinga sanguinea (C. Koch 1844) シロスジシヨウジョウグモ 2001. 6. 9 ♀
Larinia argiopiformis Bos. & Str. 1906 コガネグモダマシ 2000. 9. 2 y
Neoscona mellottei (Simon 1895) ワキグロサツマノミダマシ 2000. 9. 2 ♀
Neoscona punctigera (Doleschall 1857) コゲチャオニグモ 1999. 8. 29 ♀
Yaginumia sia (Strand 1906) ズグロオニグモ 2000. 5. 5 ♀

Lycosidae コモリグモ科

- Pardosa yaginumai* Tanaka 1977 キシベコモリグモ 2000. 10. 7 ♂
Pirata clercki (Bos. & Str. 1906) クラークコモリグモ
2001. 6. 9 ♀ 2001. 8. 17 ♀

Pisauridae キシダグモ科

- Dolomedes raptor* Bos. & Str. 1906 アオグロハシリグモ 2001. 7. 7 y

Ctenidae シボグモ科

- Anahita fauna* Karsch 1879 シボグモ 2000. 8. 12 y

Agelenidae タナグモ科

Agelena limbata Thorell 1879 クサグモ 2000. 9. 2 ♀

Agelena opulenta L. Koch 1878 コクサグモ 2000. 9. 2 y

Amaurobiidae ガケジグモ科

Coelotes exitialis L. Koch 1878 ヤチグモ 2000. 5. 13 ♀

Anyphaenidae イツツグモ科

Anyphaena pugil Karsch 1879 イツツグモ 2001. 5. 12 ♀

Liocranidae ウエムラグモ科

Itatsina praticola (Bos. & Str. 1906) イタチグモ 2000. 8. 12 y

Phrurolithus coreanus Paik 1991 キレオビウラシマグモ 2001. 6. 9 ♀

Clubionidae フクログモ科

Clubiona japonica L. Koch 1878 ヤマトフクログモ 2001. 6. 9 ♂

Clubiona lena Bos. & Str. 1906 トビイロフクログモ 2000. 5. 13 ♀

Clubiona yaginumai Hayashi 1989 ヤギヌマフクログモ 2001. 6. 17 1♀1♂

Gnaphosidae ワシグモ科

Drassyllus sanmenensis Platnick & Song 1986 エビチャヨリメケムリグモ
2000. 5. 5 ♂

Sernokorba pallidipatellis (Bos. & Str. 1906) マエトビケムリグモ
2000. 5. 13 ♀

Philodromidae エビグモ科

Philodromus subaureolus Bos. & Str. 1906 アサヒエビグモ 2001. 6. 9 ♀

Thomisidae カニグモ科

Coriarachne fulvipes (Karsch 1879) コカニグモ 2001. 5. 12 ♀

Diaea subdola O. P. -Cambridge 1885 コハナグモ 2001. 7. 7 ♀ 2001. 7. 14 ♂

Lysiteles coronatus (Grube 1861) アマガイエビスグモ 2000. 5. 5 1♀1♂

Oxytate striatipes L. Koch 1878 ワカバグモ 2000. 8. 12 ♀

Synema globosum (Fabricius 1775) フノジグモ 2000. 9. 2 ♂y

Tmarus rimosus Paik 1973 セマルトラフカニグモ 2001. 6. 17 ♀

Xysticus croceus Fox 1937 ヤミイロカニグモ 2001. 6. 9 2♀

Xysticus saganus Bos. & Str. 1906 オオヤミイロカニグモ 2001. 6. 9 ♂

Xysticus trizonatus Ono 1988 オビボソカニグモ 2001. 7. 14 ♀

Salticidae ハエトリグモ科

Evarcha albaria (L. Koch 1878) マミジロハエトリ 2001. 6. 9 ♀

Myrmarachne inermichelis Bos. & Str. 1906 ヤサアリグモ 2001. 6. 9 ♂

Myrmarachne japonica (Karsch 1879) アリグモ 2000. 9. 2 ♀

Neon reticulatus (Blackwall 1853) ネオンハエトリ 2001. 6. 9 ♀

Plexippoides doenitzi (Karsch 1879) デーニッツハエトリ
2000. 5. 5 ♂ 2001. 6. 9 ♀

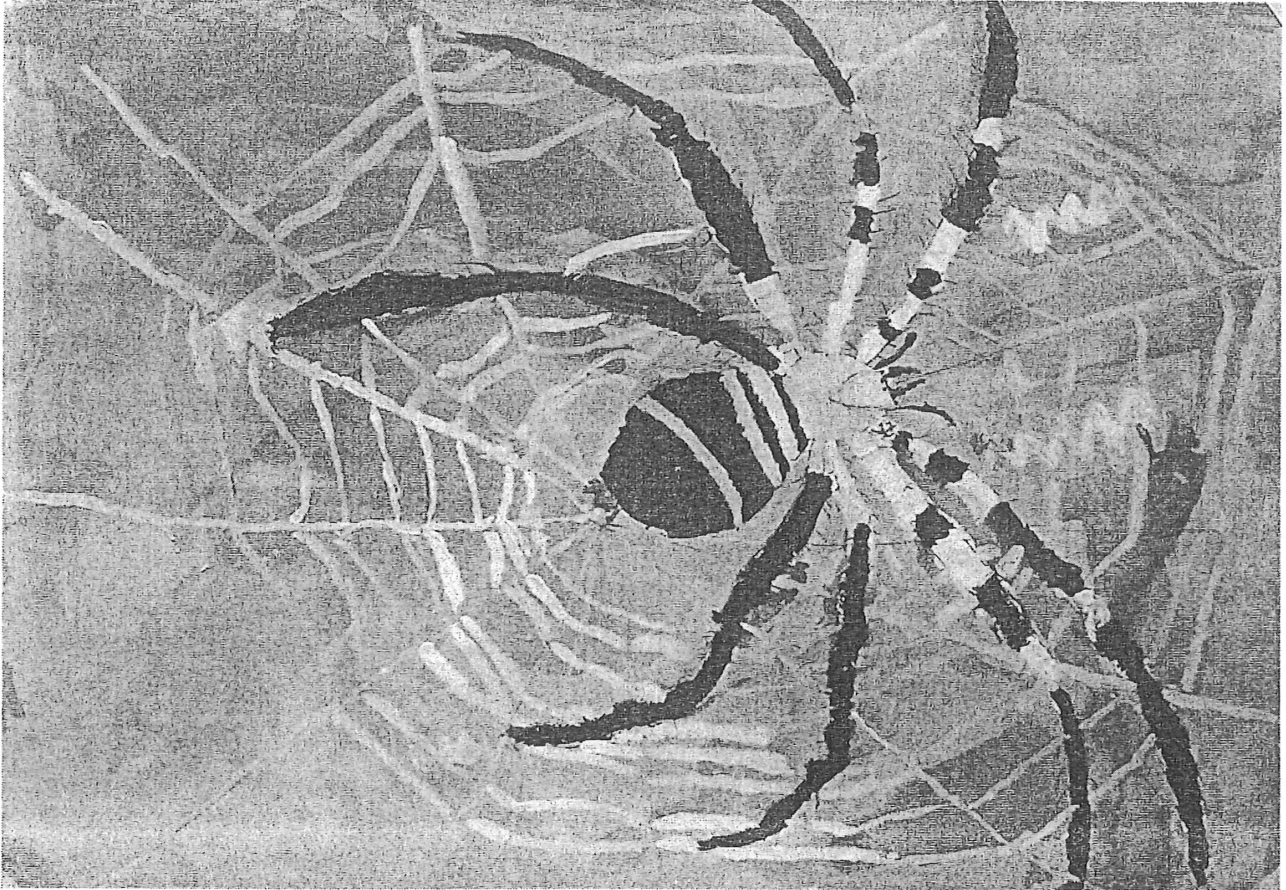
Rhene sp. ヒメカラスハエトリ 2001. 5. 26 ♀

Sibianor pullus (Bos. & Str. 1906) キレワハエトリ 2001. 6. 17 2♂

Siler cupreus Simon 1888 アオオビハエトリ 2000. 5. 13 y

Yaginumanis sexdentatus (Yaginuma 1967) ムツバハエトリ 2000. 5. 5 ♀

勇介美術館



池田勇介君がすばらしい絵を送ってくれました。原色でお見せできないのが残念です。どうやったらこんなにうまく描けるか、教えてほしい！(Y)

インターネットのクモ情報

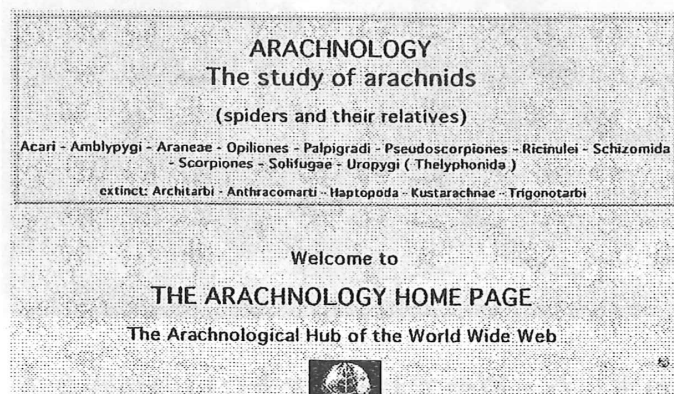
梶元敏也

これまで、「くものいと」でインターネット関連の紹介がなかったので、クモ関連のサイトを紹介したいと思ったのだが、この数年間で、インターネット上のクモ情報は飛躍的に増えていて、すべてを紹介するのは難しい状態にある。そこで、まずは欲を出さず、普段、私自身が閲覧しているホームページを紹介する。

海外のページ

[Arachnology]

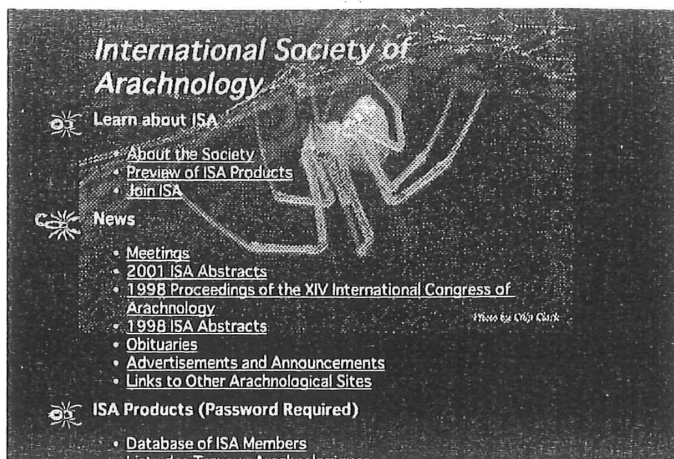
このページは10年ほど前からベルギーの方が運営しているサイトで、クモ関連のページでは老舗でもある。内容も充実していて、クモに関する趣味的な内容から、プロの研究者向けの情報まで幅広い。特に、世界のクモ研究者へのリンクが充実している。日本の研究者も何人か登録されていて、私も数年前、突然このサイトの管理者から、ホームページへリンクさせてほしいとのメールが来た。いったいどこでどうやってアドレスを探したのかわからないが、とにかく精力的にページを運営している。クモ類に関連するたいの情報はこのページで得られるので実に重宝している。



<http://www.ufsia.ac.be/Arachnology/Arachnology.html>

[ISA のホームページ]

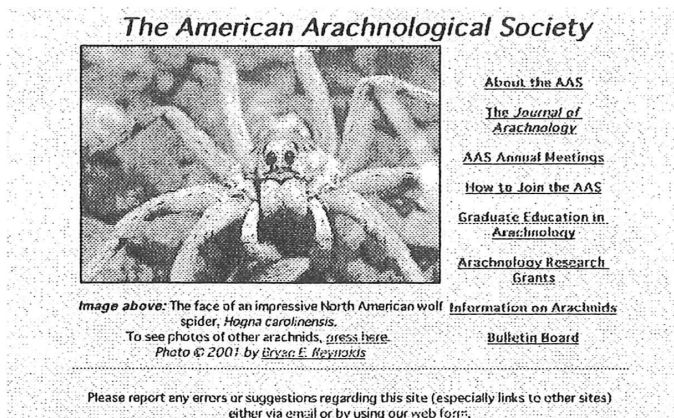
国際蜘蛛学会のホームページである。ISA のメンバーでなければ入れないサイトもあるが、多くは公開されていて、過去の国際蜘蛛学会での講演要旨や蜘蛛文献リストなどが参照できる。毎年作成されるPDF版の蜘蛛文献リストは圧巻で、クモに関する資料を得るにはZoological Recordよりも役立つ。ISAへの入会も、このサイトからできる。



<http://160.111.87.78/ISA/default.html>

[The American Arachnological Society のホームページ]

アメリカ蜘蛛学会のホームページ。大会の案内などもあるが、このページの最大の売りは Journal of Arachnology (JOA と略) のページ (下記) へのリンクである。この雑誌に載っている論文はおもしろいものが多い。しかも、ここ数年発行された記事は、無料でダウンロードして読むことができるのだ。普通、会員以外だと、要旨か記事の一部しか読むことができないようになっているものだが、JOA は太っ腹である。記事は PDF 形式のファイルなので、印刷に近い状態で入手できるのもうれしい。



<http://www.americanarachnology.org/>

The Journal of Arachnology

The Journal of Arachnology (ISSN 0160-8202), a publication devoted to the study of Arachnida, is published three times each year by the American Arachnological Society. Subscriptions accompany society membership or may be purchased by institutions ([press here for membership/subscription information](#)).



JoA On-Line (1999-present). On an experimental basis, the Society now offers an electronic version of recent issues of the Journal of Arachnology.

Additional information:

- [Instructions to authors](#)
- [Editors and Editorial Board](#)
- [Contact for undelivered issues](#)
- [How to obtain back issues](#)

<http://www.americanarachnology.org/JOA.html>

日本のページ

[SPIDER DATA]

神奈川の池田博明さんのページ。このページには凄いコンテンツがいくつもあって、私がおもしろいと思うのは「日本産クモ類生理生態辞典のオンライン版」「東京蜘蛛談話会の詳細な記録」「実用クモ検定」である。これらのページ作成にかかった池田さんの労力には頭が下がる。このページはこの他にもクモの本や高校教育関連の記事などもあり、盛り沢山である。

MENU

SPIDER DATA

日本産クモ類データベース (Mykology: BLSGA)

JAPANESE VERSION (日本語版)

このホームページはクモについて知りたいあなたのためのデータベースです。
内容はテキスト中心で写真や図はほとんど入っていません。ときどき更新しています。
初版1998年9月15日。(監修・作成/池田博明; 協力/西野剛史, 西野明子, 谷川明男)

◆最終更新日 2001年11月26日

NEWS
1. 実用クモ検定, 2. 日本ハエトリクモ研究会センター

メッセージ Attention Please!
*** このデータベースを利用して書いた文章を公開する場合は、参考文献に次のように記すか、それぞれの内容および項目に応じて、きちんと参考文献あるいは著作権を明示して下さい。***
参考文献 池田博明 (監) 2001. SPIDER DATA. Hypertext version. JAPAN.
たとえ商用利用でない場合も盗用はしないで下さい。

目次

[BACK TO MENU](#)

1. クモのデータベース (日本産クモ類生理生態辞典やクモ目録)
2. 身近なクモ (案内や学校内の身近なクモの紹介)
3. クモの記録 (トドックスミダニ 日産の毒蛛クモガミ検定など)

<http://village.infoweb.ne.jp/~fwgd9084/spiderdata.htm>

[日本クモ学会のホームページ]

実は、まだ日本蜘蛛学会は正式版をリリースしていないのだが、池田さんが試用版として公開している日本蜘蛛学会の公式ホームページ。すでに、かなり完成しているので、アクセスしてみよう。



Arachnological Society of Japan

日本蜘蛛学会 公式ホームページ (試用版)

[Japanese version Here](#) | [English version link](#)

組織
Organization

目次
Contents

歴史
History of
Society

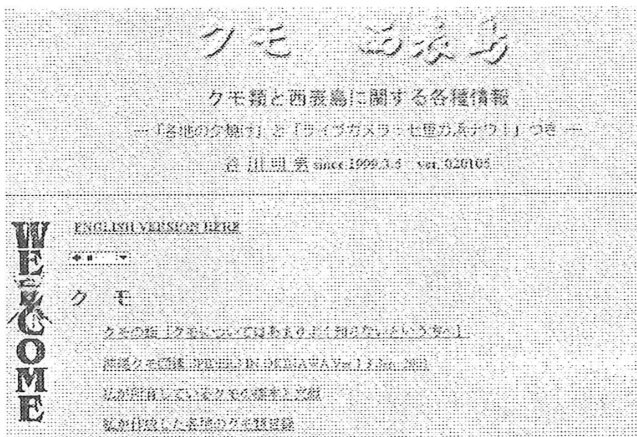
入会申込
Submit

関連リンク
Links

<http://www.asahi-net.or.jp/~hi2h-ikd/asjapan/index.htm>

[クモ 西表島]

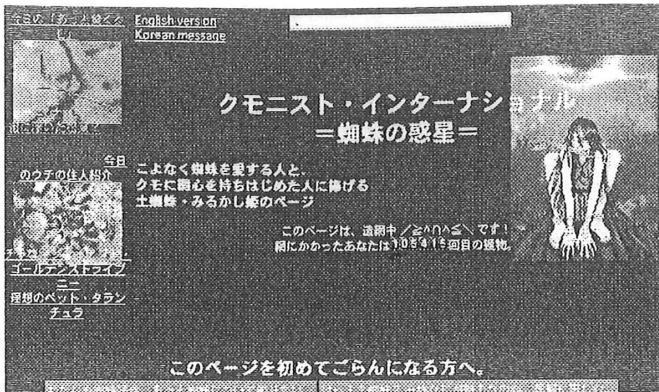
谷川明男さんのページ。ここには「遊絲のPDF版」、「日本産クモ類目録 ver. 2001R2」をはじめとする、神奈川、沖縄などの目録など、クモの研究に直接役立つ資料が豊富である。さらに、このページの中のクモの写真の美しさは圧倒的で、クモに関する図鑑の出版が少ない現在、ネット上で様々なクモの写真を見ることができる。



<http://www.asahi-net.or.jp/~dp7a-tnkw/index.htm>

[クモニスト・インターナショナル]

作者はみるかし姫を名乗る八幡明彦さんのページ。国内のクモサイトでは、ページデザインのハデさ、ユニークさではピカールのページだ。先に紹介した池田さんや谷川さんとは異なるエンタテイメント路線で、おもしろい。インターネットのコンテンツはONLY ONEであることが大切なので、こんなページは世界のどこにもまだ見つからない。いろいろな箇所に遊び心があって、退屈しないページである。



<http://mirukashihime.cool.ne.jp/index2.htm>

はじめにも書いたが、とにかくたくさんページがネット上に存在している。この他にも福島さんのページ (<http://lt.jpn.org/nobo/html2/ito.html>) や加村さんのページ (<http://www.res.otemon.ac.jp/kamura/index.html>) など、日本には続々と個性的なクモページが増えつつある。また、おもしろいクモページがあれば紹介します。

私たちの研究仲間

清水裕行

ある人と話していたとき、蜘蛛学会会員の年齢層が話題になった。私が「以前に比べると高齢化の傾向がありあますが、一方で、若い仲間の参加もありましたよ」と言って、「くものいと」29号の奈良市採集会の写真を見せたところ、その人は突然笑い出した。私がキョトンとしていると、その人は「えっ、本当なんですか」と聞き返してきた。その時はわけがわからなかったが、後からははんと思った。

我々から見るとあの写真に写っているのは「家族とともに参加した池田勇介君」であるが、一般の人の目には「家族を伴って参加した池田幸二氏」あるいは「子連れで参加した池田夫妻」と写るのであろう。その人は私が冗談を言ったと受取ったらしい。

私たちからみれば、幼稚園児であっても、同じクモ屋仲間であり、同じ目線から話すことができる。しかし外の人はどうしても大人中心の、権威というフィルターを通して見ることになる。私も別の世界を見るときにはこのフィルターを使っているのかもしれない。

私が児童生徒と接するとき、御両親が「(年だけはくっている人が) こんな子供と真剣に對してくれる」と感激されることがある。蜘蛛学に限らず、ナチュラリストの集団では年齢とか社会的肩書きに囚われず、同じ仲間として扱う傾向が強い。多くの場合、動物は大学の先生になら捕まってやろうと考えたりせず、熱心に採集・研究する者が「良い仕事」をできるため、そういう人が尊敬される。本来、学問というのはそうあるべきであろうが、natural history (博物学・自然史学) の場合はその名の通り、歴史学的性格が強く、事実の記録が中心になるので、その傾向が強いのであろう。事実ほど強いものはないからである。

故八木沼健夫先生の美德のひとつとして、よく「腰が低い」ということが挙げられる。私が初めて先生にお手紙を出したときにも、「クモの研究を続けるとのこと嬉しく思います。どうかおいでください」と懇切な御返事をくださった。「大学教授で理学博士が」と母も驚いていた。学会会員とはいえ一面識もない十代の若造にこのように対応されるのは、クモの研究を第一義と考え、共にそれを目指すという認識があったためでもあろう。高名な女性旅行家が「世界を歩いていると一流の人は皆、腰が低いことがわかる」と語ったという。「大欲は無欲に似たり」というが、大きな目的を持った人にとってはそれが最も大切なことであるから、小さな世俗的なことにはこだわらないのであろう。

しかし、居丈高に出る者に対しては卑屈になり、控え目な人に対してはでかい態度をとる人種はどこの世界にもいる。以前、蜘蛛学会の大会で八木沼先生に対し、傲慢ともとれる態度を示した大学院生らしき若者を目撃し、不快になったことがある。(詳しい事情は覚えていない。私の僻目だったのならば幸いだが) 文献探しに苦勞し、師と仲間を求めて学会に入った者がこのような態度をとることはないが、指導者や参考書が完備した大システムの中に身を起し、たまたまクモを修士論文のテーマにしたた

め、発表の場を借りにきたお方にとっては蜘蛛学会と蜘蛛学者を軽視するのはごく自然なことなのかもしれない。自由平等であるはずの学者の集まりが、“社会的地位”を獲得するに従って権威優先になるのは残念なことである。この点、蜘蛛学会はまだ良い意味での大衆性を保っている。アマチュアの占める割合が大きいためでもあろう。

以前、「アニマ」という雑誌があった。自然をテーマにした写真雑誌の走りでもしばしば題材になった有意義な雑誌である。この「アニマ」のある号に東亜蜘蛛学会（当時）に関する奇妙な紹介文が掲載された。「一度行って御覧なさい。学校の先生が写真屋さんに教えるを請うている面白いところですよ」という趣旨だった。「写真屋さん」が学会で活躍して仲間の尊敬を集めているのは事実であるし、それが蜘蛛学会の誇りとすべきことである。しかし、私は素直に受取れなかった。「（実力のない）素人が幅をきかせているひとりよがりの集団」という揶揄が感じられた。理由はこの記事の最初の部分にある。この記事自体は「特派員報告」といったタイトルがついた、東亜蜘蛛学会大会参観報告であった。

私はこの大会には不参加だったが、ナガコガネグモの卵嚢製作過程が話題になったという。かのファーブルが『昆虫記』に発表したのとは異なる観察結果が報告された。これに対して、「特派員」は「未熟者たちが身の程知らずに勝手なことを言い合っていた」という論調で酷評していたのである。八木沼先生によれば、決してファーブルの記録を否定したわけではなく、ユーラシア大陸の両端での習性の違い、あるいは分類学的な差異がある可能性も議論されたという。しかし、ファーブルといえば生態研究の神様のような存在であるから、「特派員」にはとんでもない行為と映ったようである。この「特派員報告」の前半部を鵜呑みにした読者がいれば、「写真屋さん」を肯定的・建設的に理解できるだろうか。ひとつの事実が見方によって正反対の評価を受けることがあるという好例ではないだろうか。そういえば、ATYPUSの編集方針が「柔軟」なことを「程度が低い」と評価するむきもあったという。

「アニマ」の記事については、中傷とさえ感じられた。そこで、後の大会で同誌の編集者と話す機会があったので、この点をただしたところ、「投稿者の自由な判断なので、編集部としては責任を持ってない」とのことだった。「特派員」というのは編集者でも囑託でもボランティアでもない一読者で、この欄は単なる投書欄であつたらしい。

ちょこっとニュース

ベトナムの女性は怖い？

「あなたばかり海外に行けていいわね。私も死ぬ前に一度は行ってみたい」と、妻が言う。何も死ぬまで我慢することはないというわけで、ベトナムに家族旅行に行った。治安があまりよくないというので心配したが、幸いなことに、事件や事故には遭わなかった。ホーチミン市は人口500万人の大都会。バイクの洪水はすさまじいばかりである。二人乗りはあたりまえ。赤ん坊を抱いての4人乗りも少なくない。当然ながら排気ガスがひどく、サングラスにマスクをつけたドライバーも多い。

信号はあまりなく、あってもみんなあまり守らない。バイクの洪水を掻き分けて道路を横断するのが大変だったが、2、3日すると平気になるから不思議だ。買い物はまるで戦争である。客引きがすさまじく、優柔不断な態度を取っていると、あつというまに店に連れ込まれる。妻の腕をつかんで離さないおばさんもいる。見てるだけだからと言っても、しつこくいつまでも付きまとう。しかし、よく見ると、猛烈なのは女性だけで、男性の店員はおとなしい。客引きもしないし、商品の値段を覚えていない人も多い。昔風に言えば、「髪結いの亭主」というやつだ。

アオザイがよく似合う美人が多いが、どうも気に入らない。パワフルといえば聞こえがいいが、あつかましが目立つのだ。発展途上国の大都会はみんなこんなものかもしれないが、ベトナムの男性に少し同情してしまった（吉田真）。

編集後記

●2月23(土)、24(日)と暖かく天気も良かったので久しぶりに野山にでかけた。寒い寒いと家にこもっている間に外では確実に春が訪れていた。川縁ではネコヤナギが銀色の花穂を立ち上げ、土手の枯れ草の上では空色の星をちりばめたようにオオイヌフグリの花が咲き、黄緑色のノビルの束が勢いよく伸び出していた。クモの網はまだほとんどみられなかったが、もう一月もすれば活動を始めてくれることだろう。「くものいと」31号、今回も大幅に遅れてしまったがやっと発行にまでこぎつけることができた。当初予定していた内容とはかなり異なったものになってしまったがそれなりに読み応えがあるのではないかと思っている。(船曳)

●昨年秋から体調が悪く、今回は企画だけ提案して、あとはすべて吉田先生と船曳さんをお願いしてしまいました。吉田先生にはお忙しい中、編集作業をしていただき、ありがとうございました。内容が当初の企画とはかなり変わったということですが、書きたいことを書いていただけのだけで万々歳。変更大いに結構だと思います。次回は編集作業に復帰したいと思うのですが……。まだまだ気力が出ない私です。(柗元)

●柗元さんに代わって久しぶりに編集作業をしたら、発行がこんなに遅くなってしまって申し訳ありません。仕事が遅いうえに、ベトナムに遊びに行ったりしたら、遅くなるのも当然です(反省!)。ところで、今回は非常に多くの方の原稿をいただきました。有難うございます。今年も女性が元気のように、船曳さんのアートが世界にデビューし、仲程さんのアートも大好評のようです。私もパワーをいただきたいものです。

最後に、読者の皆さんに一言。くものいと31号はどうでしたか?ぜひご感想をお寄せください。編集者は、いつも読者の反応が気になるものです。くものいとをより良いものにするために、忌憚のないご意見をお寄せください。(吉田)

<関西クモ研究会>会長 山野忠清
編集 吉田 真
船曳和代
柗元智子
庶務 加村隆英
会計 牧野達也
顧問 西川喜朗

くものいと31号 発行年月日 2002年2月28日
発行 者 関西クモ研究会(代表 山野忠清)
住 所 〒567-8502 大阪府茨木市西安威2-1-15
追手門学院大学 生物学研究室内
TEL: 0726-41-9550(加村研)
